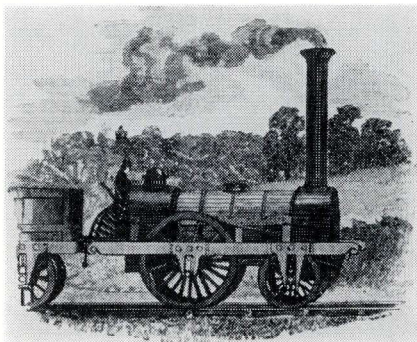


序章 創業前史





G・スチブソン機関車

一八二五年登場の世界最初の旅客列車専用機関車。G・スチブソン製作にかりストックトンからダーリントン間を走行した。

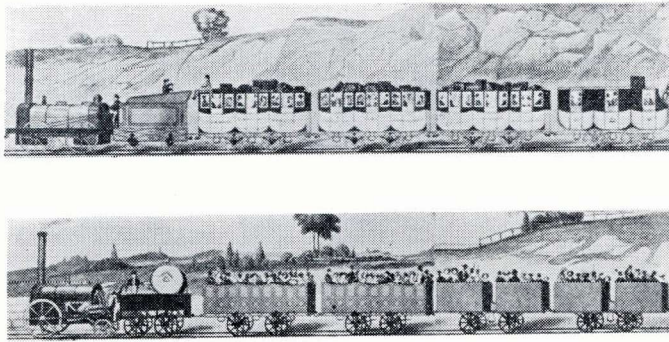
## 一、鉄道のはじまり

日本国民の前に、はじめて蒸気機関車牽引の鉄道列車がその雄姿を現わしたのは、明治五年（一八七二）であった。九月十二日（旧暦）、新橋く横浜間開業の式典が挙行されたのである。クルマを牽くものといえば、牛や馬に決まっており、牛馬に代わって人が牽く人力車（人力車）日本人の発明）開業も実はその二年前。蒸気で動く機関車を見た人びとがびっくり仰天、「黒い鉄の牛」と評したのも、まさに実感的表現であろう。

明治元年、維新の大業が緒についたといっても、一般国民の目には具体的になにがどうなっているか明らかでなかった。版籍奉還（明治二年）、廃藩置県（同四年）、学制頒布、太陽曆採用（同六年）などと相次いで重要施策が加えられたが、国民の肉眼に見えるものではなかった。

そのころの日本人にとって、近代的な機械あるいは動力エネルギーなどの存在は、まったく無縁というに近かった。人やモノを運ぶのに動力エンジンなどを使うクルマなどは、ユメのまたユメであった。地位ある人や金持ちなどを運ぶのにカゴがあれば、すべてことは足りたのである。そこへ突如として蒸気機関車（当時の人は「陸蒸気」と呼んだ）が姿を見せたのだからキモをつぶすような衝撃だったであろう。

蒸気機関車の祖国イギリスでこの移動するエンジン〔locomotive steam engine〕が登場するのは一八二五年（文政八年）であった。いいかえると、イギリスの産業革命の完成を飾るにふさわしいできごとであった。定置式エンジンは、産業革命の初期において、すでに鉱山や炭鉱などの排水・送風ポンプの動力源として開発されていた。その延長線上にこの蒸気機関車が現われ、多量の人とモノを



創業当時のリハプール・マンチエスター  
鉄道の列車風景

上図は、一等車〔一八三〇〕下図は、  
二〜三等車〔一八三二〕

運送する大役を果たすようになったのである。

イギリスで、この蒸気機関車が実用化されるのは一八三〇年〔天保時代〕以降のことだから、新橋〜横浜間の運転開始に先立つことわずか四二年である。しかし、その当時の日本は、前述のように、近代的な機械あるいは動力エネルギーなどの導入についてはゼロに近かった。いくらかの近代化の歩みはあったにせよ、日本的な産業革命がやってくるのは、それから一〇年も二〇年もあとのことだ。いかなれば、英国に引き比べて日本の鉄道は逆子のような生まれ方をしたわけである。ヨーロッパ諸国でも、イギリスを除いてはほぼ同じことがいえそうだ。関一講述の『鉄道講義要領』〔明治四十四年増補九版〕によれば、

同鉄道は維新改革の当時新旧思想の争闘に際し英公使パークスの勧誘と伊藤〔博文・大蔵少輔〕大隈〔重信・民部大輔兼大蔵大輔〕二氏の熱心なる主張とに依り明治二年十一月十日の廟議を以て敷設を決せられたる所にして百万磅の外債を募集し明治三年四月より起工し五年五月品川〜横浜間〔仮運転〕の運転開始となり同年九月東京〜横浜間の開通を見たるとある。

日本側のたて役者は、なんといっても伊藤博文である。徳川の末期、密航してイギリスに渡った経験を持っており、現地で疾駆する汽車を見ている。おそらくは乗ったこともあるだろう。さらにその同輩に同藩出身の「日本鉄道の父」といわれる井上勝がいた。当代きっての新知識グループの先駆者である。これに佐賀出身の葉隠武士ながら、幕末動乱期にいち早く蘭学、英学を修めた大隈重信。海外生活の経験はなかったが、長崎における外国使節団との交渉では場数を踏んでいた。「廟議を以て敷設を決せられた」といっても、この二人の牽引力は絶大であったに違いない。

問題は、イギリス公使のハリー・S・パークス〔一八二八〜一八八五〕の存在。彼が特命全権公使として日本に来たのが慶応元年〔一八六五〕で実はその前に通訳官としてイギリス外交事務に従事してい



伊藤 博文



大隈 重信

た。それも一八四一年「天保十二年」、一三歳のときに清国へ渡ってきていたというから、文字どおり、大英帝国の植民政策の尖兵の一人であった。

維新政府に政権が移るや、さっそく、右大臣三条実美、大納言岩倉具視らに働きかけ、鉄道創建の急務を説いた。イギリス本国では、一応鉄道ブームは完了、自国植民地をふくめて海外諸国向けに資材、機関車、車両など鉄道設備一式の輸出、これに付随する技術者グループの派遣を着々実行に移していく時代を迎えていた。

かれら日本の要路の大官に対し、パークスのいわくには、

……鉄道は政府の手にて経営せられよ、これを他人に許さば政府の威権は奪わるべし。又現今各藩の分別ありて民心統一を欠けばこれを治むるに必ず交通をもつてせざるべからず、鉄道はその大要具なり：鉄道にして一貫せんや、瞬時に往復し得れば人心も随て調和すべし

と、まるで政府顧問のような建言。アングロ・サクソンの世界植民地化の一翼を担う意欲がうかがえるが、当時の日本最高首脳陣にとってはまさに頂門の一針であった。

さらに、パークスは、明治元年、京都で暴漢に襲われたことを例にひいて、こんな無頼漢が出没するのも、つまるところは、文明開化のおかげを知らぬからである。ちょうど今が国民大衆にそれを知らせる潮時である。そのためにも鉄道と電信の二大事業を興すこと「物質文明を實物で見せること」が急務である、と説いている。

たしかに、このパークスの助言は的を射たものであったが、彼には彼なりの計算があった。というのも、維新前夜すでに、フランス、アメリカ、イギリスの官、民入り乱れての鉄道建設売り込みが展開されていた。売り込む側でも相手方に幕府をとるか、あるいは維新政府を選ぶかで大いに迷っていた。植民地経営の実際では断然、群を抜いていたイギリスである。ぴったりと新政府の実力者大隈、伊藤の脇腹にそうようについたのがはかならぬパークスである。そのパークスは、手許不如



H・S・パークス



井上 勝

意の明治政府の台所事情を察知して、日本でははじめての百万ポンドの外債募集のことまで心配してくれた。『鉄道省『鉄道一瞥』 明治五年の鉄道』 大正十年」

パークスの友人で、清国にやとわれていたホレーシオ・ネルソン・レーなる人物が年利一割二分で外債の面倒を見ようというので、大隈、伊藤のご両人はこれにいつさいを任せた。ところが、本国に帰ったレーは、富豪の友人と相談の上でというのはうそで、一般から九分の利息で公募、すばやく三分のサヤを取ろうとしたのである。日本政府は大あわてで、契約解除に当たらせ、なんとか穩便に事を運ばせて、イギリスのオリエンタル銀行に委託して、目的を達成した。

「しかし、レーとの契約事情も、今日からみれば、むしろ外債というものに無知だった当時の日本政府のほうに問題があったのであって、契約書の記載事項にはなんらレーは違反していなかったのである」〔原田勝正・青木栄二『日本の鉄道』 百年の話』から 昭和五十二年〕

ところで、このネルソン・レーについては、上記の『鉄道一瞥』はかなり好意的な筆致でその来歴を紹介しているが、一般的には、いちじるしく疑惑の目で見られている。古くは、時事新報社経済部編『利権物語』〔昭和二年〕、近くは原田勝正『明治鉄道物語』〔同五十八年〕などを見れば、一筋なわではいかぬ人物であったことが察せられる。パークスといい、レーといい、やはり植民地拡充時代、大英帝国に最も忠誠なイギリス人だったに違いない。

ついでながら、新橋〜横浜間の鉄道建設当時、直接外国人技師たちと作業現場で接触のあった日本人たちの談話を紹介しておこう。大正十年（一九二一）十月十四日の「鉄道五〇周年記念祝典」が挙げられたときの談話である。

そのうちの一人「測量係」は、毛織のダンブクロに小倉の脚絆、わらじばきで、チョンマゲを結び、陣笠をかぶり、刀をさすいでたちだったから、維新を知らぬスタイル。

そのいわく、「建設資材はもちろんのこと、製図用紙・鉛筆・紙・ペン先・マッチの類にいたるまで

「旅客注意」書き

明治五年五月七日、品川―横浜間仮開業に際して、「時刻・賃金表」につけて掲示された「旅客注意」書き

来る五月七日より此表示の時刻に日々横浜並に品川ステーションより列車出發す乗車せむと欲する者は遅くとも此表示の時刻より十五分前にステーションに來り切手買入其他の手都合を為すへし但発車並に着車共必ず此表示の時刻を違はざるやうには請合かたけれども可成丈遅滞なきやう取行ふへし  
手形は其日限り乗車一度の用たるへし  
小兒四歳までは無賃其餘十二歳までは半賃金の事

旅客は總て鉄道規則に隨ひ旅行すへし  
手形検査の節は手形を出し改を受又手形取集の節は之を渡すへし〔中略〕  
發車時限を怠らざるため時限の五分前にステーションの戸を閉さすへし  
吸煙車の外は煙草を許さす

〔「鉄道一瞥」〕

悉く全部外国から輸入したことで外国語に対する知識が乏しかったため、日本がどれほど損をしたか分かりません。例えば、見積書にスリッパ「正確にはスリーパー」何万丁と書いてある。スリッパという語を知っている者がいない。辞書を見ても書いてない。ところが注文書を発送して外国からきたのを見ると、枕木だったのです。枕木ならば日本にも朽ちるほどあるのだと笑ったこともありました。一事が万事こんな具合で、日本にあるもので間に合わせたのは石と土くらしいものでしょう。別の作業員「火夫見習一七歳」は、創業当初、イギリスから六台の機関車がきたが、そのうちの二、三台は中古で、ずいぶんバカにした話だった。使用にはさしつかえないというので我慢したはず、と内幕をちらり明らかにしている。また、この人物は、指導に当たる外人たちが、日本人の耳を引っぱって引き回したり、チョンマゲをなでていたかと思うと、突然ハサミを持ち出して切り落としてしまったなど、日常の横暴ぶりを述べている。「岩崎磯五郎『汽車と鉄道』昭和十七年十月」

建設現場の第一線に従事した人たちのさりげない思い出からみても、そのまま黙視しておればどんな方向に持っていかれたかわかったものではない。当然のことながら事態の内容を察知する勢力が起こってきた。

上記の外債問題からもうかがえるように、一步を誤まれば、先進諸国の植民地あるいは半植民地になり下がる恐れは十分にあった。

これを阻止する勢力があったことを注記しておく必要がある。鉄道敷設は時期尚早なりとする参議西郷隆盛の反対論もさることながら、要路の大官ほとんどが敷設することに否定的で、推進者の大隈、伊藤の身边が実際に危ぶまれるような事態もあった。こうした反対意見・勢力があった結果、推進派も一定の自制力を持たざるを得なかったといえそうだ。

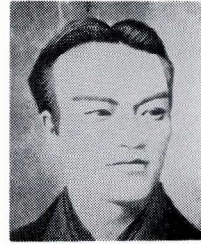
鉄道敷設は、お膝元の新橋―横浜間だけではなく、ほぼ同じころ、大阪―神戸間の建設計画が進められ、明治三年十一月に着工した。この方は、二年おくらせて七年五月十一日に開業にこぎつけた。

以上、東・西に短距離ながら鉄道の敷設を見たが、実は明治政府がかねてから進めようとしていた一連の産業振興策の一環であった。業種別には造船、通信、紡績、製紙、海運、鉱山等がその対象であった。しかし地力が備わらなかったため、造船、通信等は官営式。紡績、製紙等は模範工場助成方式を採らざるを得なかった。しかし、そのいずれをとっても、現代的な企業採算の意識は低く、一〇年以上も後になって民間払い下げの形で、ようやく自立企業となるわけである。

さきあげた関一の『鉄道講義要領』はさらに次のような特徴づけを加えている。

……明治二十五年鉄道敷設法発布に至るまでは、鉄道発達史の第一期に属するものにして、この二〇年間の政策は、もっぱら鉄道普及を計るに在りて、官私設の明瞭なる方針なく時々必要に応じて、あるいは政府自ら敷設に従事し、あるいは補助政策を採りたるを以て、他動的断片的の政策あるに過ぎず

とし、手厚い保護、助成策を受けたにもかかわらず、自立するのに日時を要したことを伝えていく。いい換えると、上からの誘導による鉄道事業育成策がとられたわけだが、多少とも形をなしたのが日本鉄道会社である。明治十四年〔一八八一〕十一月の創立で、十七年六月に上野―高崎間が開通する。後に政府買上げで国鉄東北線となるのがこの半官半民の日本鉄道。設立に当たっては、右大臣岩倉具視の尽力、金融財政面で参議・大蔵卿松方正義から全面的な支援を受けた。「非常事変・兵乱等の際には会社は政府命に応じ政府に鉄道を自由に使用せし」むることが「特許条約書」の中に交わされていることから逆に政府庇護のほどが察しられる。



五代 友厚

## 出没する幻の“阪堺鉄道”

この日本鉄道の営業開始の同年に、阪堺鉄道の設立、翌年に創業が続くが、地元大阪においても、一再ならず私鉄建設の出願があった。その阪堺鉄道が、実を結ぶにいたるまで、この大阪と堺間に鉄道建設を出願するもの、内外合わせて五指を超える盛況であった。官鉄の大阪と京都、大阪と神戸は問題外として、維新以来、鉄道敷設のはなしになると、必ず大阪と堺間が第一候補にあり、その他地区は、ふしぎといえるくらい候補にも話題にもならなかったようだ。やはり、南蛮貿易の国際港として栄えたこと、維新後も商工業がなお盛んであったことも、この二都市を一体的に考えさせた理由であろう。

明治維新から十年代末ごろまでの大阪財界は五代友厚（一八三五―一八八五）を抜きにしては語るこゝとができない。五代は薩摩藩時代は文武兼ね備えた志士として活躍、早くから西欧文物の摂取に努力を重ねていた。ことに、慶応元年三月に一四名の留学生を率いてイギリスへ渡航した体験は、やがて財界人として活躍する見識をつくる要因となった。

維新政府となるや、大阪在勤となり、外国官権判事、大阪府知事を仰付けられた。のち、明治二年五月十五日、会計官権判事を仰付けられ、横浜に左遷される事態がやってきた。故郷薩摩の旧同輩が、五代の出世をねたんであらぬことをいいふらした結果である。

ところが、大阪では断然人気のあった五代さん、事務局一同連署して留任を政府に嘆願したという。五代個人としても悪くない気分。ここは男子一生、意気に感じてと、すっぱり官界から足を洗う決心をした。三五歳のときだから、当時としては年配者扱いである。彼としても相応の決心を要したことだろう。それから十八年九月二十五日、没するまでの一五年ほどの間に、堂島米会所（のちの米穀取引所）、大阪株式取引所（同証券取引所）、大阪商法会議所（同商工会議所）等の公的機関のほか、

自ら製藍事業〔朝陽館〕や鉱山開発に当たり、渋沢栄一や藤田傳三郎らと組んで貿易事業その他にもかかわった。

そんな幅広い活動を行ってきた五代なので、当然のことながら、大阪と堺間の鉄道にもかかわりがあるはず。いや、それ以前、大阪と堺間ではないが、大阪と神戸間の鉄道敷設にかかわったことがある。明治二年三月のころというから、五代が退官する直前のことである。

やって来たのがアメリカの領事W・M・ロビネットという肩書きの人物。そのいわくには、

大阪と神戸間に鉄道を築き、蒸気車、道路、小川ある所には橋をかけ……許可を得れば、二年間で工事を成就する。については、大阪から神戸までの間、幅五〇尺の土地と鉄道の両端に乗り場を建てるだけの土地を無償で貸してもらいたい。完成五年後には政府のお買上げに応ずる。一か年間に一二割の利益が計上できるはずだが、そのうち半分は日本政府に上納する。

鉄道建設に当たっては、アメリカ本場の熟練労働者と建設用具を持ってくるから、その方面のことはご心配なく。

と切りこんできた。

これに対し抜群の視野の広さと海外で活躍する外国人の考え方を熟知していた五代は、「兼々我政府において、自分手を下し製造いたし度見込に候へば〔下略〕とやんわり、申し出を拒否している。〔石井満『日本鉄道創設史話』昭和二十七年十月〕

いうまでもなく、官鉄の阪神間の工事計画がまだ計画もされていなかったころのはなしである。

そうした五代は、大阪と堺間の鉄道に関しても、ただならぬ関心を有していた。『五代友厚伝記資料』〔第三巻〕の「交通」編の中に「阪堺間の鉄道敷設」に関する資料が、一〇編ほど収載されている。もっとも、当社の前身である「阪堺鉄道」に直接関連したものでないことを注記しておく。

次に、「阪堺鉄道」が、現実の姿をもって浮上してくるまで、この地区に何度となく挑戦者が現

われている。いわば幻影の鉄路と形容されるものである。

そのシリーズを『物語日本鉄道史』『三崎重雄 昭和十七年十月』によって見よう。内容的には『日本鉄道史』『鉄道省 大正十年八月』によったもののように、「私鉄あちこちに起こる」の中の「阪堺間鉄道建設」の事情をみれば一目瞭然である。次に「阪堺」とは直接関係はないが、出願「先陣役」の西京鉄道をふくめて、出願年代順にこれを抄出してみよう。

一、西京鉄道線 明治四年八月、三井八郎右衛門ほか一七名によって請願。大阪から敦賀に至る路線を目的としていたが、さし当たっては京都と大阪とした。その建設費七〇万円〔七〇〇〇株〕の半ばを、発起人と会社仲間で分担、他は一般に公募、配当一割を政府から受け取る。鉄道の建設は政府、運輸営業も政府の手で、となんとも奇妙なお膳立て。この請願は四年九月五日一応許可となった。

ところが、受理した工部省が鉄道院へ送付して工事費を試算してみると七〇万円の倍を要することが明らかとなり、会社側は驚いて善後策を講ずることとした。それよりも中に立ったのが井上勝鉄道頭である。いろいろと辻つまを合わせようとしたが、うまくいかず、結局は、明治六年「関西鉄道会社」と改名したものの資金手当てできぬまま、同年末に解散となった。

二、「大阪と堺間」 明治六年十月二十九日請願の大阪府、鴻池善右衛門等の請願。建設については資金を提供するだけで、会社の鉄道運輸を目的としなかった。一、とほぼ同じ構想で、翌六年一月大蔵省はこれに意見をそえて上申した。しかしこの請願は却下された。

三、「大阪と堺間」 明治七年十一月、高知県有志による請願。ところが、ほぼ同じころ、堺市の有志から、まったくこれと同じ線路の建設を請願してきた。次の四、がそれである。

四、堺大阪鉄道建築会社 資本金二二万円を調達すべく画策にこれつとめたが、ついにまとまらず成立を見なかった。

さきにふれた五代友厚の残した『資料』中にその請願関係書類二通があるので、参考までに紹介しておこう。「願書」は、堺の区長沢田又七と地元の素封家、大塚三郎平を先頭に推したてて、堺

県令の税所<sup>さいしょあつし</sup>篤と大阪府権知事渡辺昇宛てに「願書」を提出したのである。

#### 願書大意

抑鉄道ノ儀ハ国ヲ富シ商ヲ盛ニシ公利ヲ増進スルノ一大事業ニシテ、方今闕<sup>か</sup>クベカラザルノ急務タル言ヲ待タズ候処、既ニ東京横浜ノ間并神戸ヨリ北越前敦賀港迄ノ線路等、政府ニ於テ追々御着手被為在候儀ハ、全ク公衆ノ幸福富国ノ基礎ヲ被為立候所以ニシテ、サキニ人智ヲ開明シ衆庶ノ志ヲ振起セシメンガ為メ御創立被為在儀ト奉恐察候処、民心未ダ振ハズ、現今概要ノ会社ヲ創立シテ隆渥<sup>てあつし</sup>ノ国恩ニ報ユルノ挙アルヲ聞カズ。依テ今般同志会同仕<sup>同役</sup>、各資本ヲ出シテ社則ヲ約シ且其地利ヲ測リ大阪市端ヨリ泉州堺迄里程凡ソ三里間ノ鐵路ヲ布シコトヲ希望ス。固ヨリ修築ノ方法運輸ノ規則等ハ概略欧米各国ノ式ニ倣ヒ、成功ヲ遂ゲ僅ニ公衆ノ裨益ニ供シ渥恩万分ノ一ヲ報ント欲ス。然リト雖モ人民所有ノ家屋山林田畑等讓受建築候ニハ人民ノ苦情モ不尠、夫ガ為メ事業ノ障碍ヲ釀シ候事、政府御施行ト雖ドモ免レ難ク苦慮仕候。況<sup>まし</sup>テ今般ノ起業ハ民会ノ義ニ付猶更紛議ヲ生ジ、彼是妨礙ヲ釀シ候テハ人民便利ノ主意モ画餅ニ属シ可申ト一同苦心仕候。伏テ願クハ、地方人民ニ関涉仕候地所家屋買入其他道路変換等ノ時ニ当リ、苦情ヲ鳴ラシ非常ノ代価ヲ申募候テハ弊社ノ目算モ違却シ、将来ノ目途ヲ失ヒ候ノミナラズ、人民初テノ施業實際困難ノ場合モ可有之ニ付、情実御扱量被為下何卒鉄道上ニ関スル要件ハ官設ノ鉄道同般ニ御処分奉蒙度、固ヨリ御国内一般ニ鉄道滿布ノ御目途被為立、地方官庁ニ於テモ特別ノ御保護ヲ蒙リ候様仕度、勿論欧米各国普通ノ許可期限モ有之候得共、此会社ハ成功開業ヨリ五十年ノ満期ニ至リ右鉄道上ニ於ル一切ノ器具家屋土地等悉皆献貢仕度希望仕候ニ付、此段御許可奉願候。以上。

「願書大意」のいうところは、国富を増進し商業を盛んにすることが第一のねらいで、これは既設官鉄の実績を見ても明らか。問題は、用地買収のことで、一般住民の家屋、山林、田畑を譲受けるについては、値段のことやその他利害食い違ふこともあり、果ては事業経営の上でソロバンの食い違ふことも起こりかねない、何卒よろしく願ひします、といった陳情ふくみ。

特異な点は、事業がうまくいった暁には、五〇年後には、鉄道その他いっさいの物件を献上します、という思いきった決意。

これを受けた税所と渡辺は、工部卿の伊藤博文に「申上書」を送ったのである。

鉄道之儀ニ付申上書

堺県下区長沢田又七、大塚三郎平ヨリ、鉄道架設之儀出願候ニ付昨七年十二月願書進達致置候処、入社之輩大阪府下之者モ多分有之、諸事府県ニ涉リ、就中衆庶之有益不少儀ニ付テハ、必事業成就為致度見込ヲ以、其保護府県トモ種々協議致候処、右願書中ニモ有之候通、架設之際家屋田畑之買入等ニ至候テハ未ダ一般弊習ヲ不脱、自今官設之鉄道スラ間々苦情相唱候考有之、折柄会社人民ト相對ニテ彼是处分候時ハ、非常之高価相貧、或ハ事業之障碍ヲ作シ物議可有之ハ必定ニテ、人民相對之代価等迄官ヨリ制限保護致候儀難至候得、實地ニ臨ミ社中大ニ経費之目度ヲ差違シ、他日ノ成功如何アラン乎、到底官唱ヲ不仰候テハ事整頓ニ難及、社中内願ノ趣モ有之、至極尤ニ相聞へ候ニ付、右会社ニ於テ費用ハ一切出金為致候上器具買入物等用度之処モ取扱可為仕候間、特別之御評議ヲ以家屋田畑之買入ヨリ経営架設之事業等ハ両府県庁ニ於テ取扱ヒ遣シ度、然ラバ保護充分ニ行届速ニ成業可致候条、実ニ先鞭之大工業従事難易等御洞察之上、前件并又七等願意トモ速ニ御許可之程於府県モ相願度、此段再申候。以上。

明治八年

堺 県 令 税 所 篤

工部卿 伊藤博文 殿

大阪府権知事 渡辺 昇

その文意は、「願書」を読みこんだうえの上申文だが、迫力はかなり薄い。しかし、明治初年の請願者のような甘い期待は願書にも「申上書」にもみられない。あとは、阪堺鉄道の出番をまっばかりということであろう。

阪堺鉄道が形を成すのに、それから一〇余年を要するが、海のものとも山のものともまだ形のき

まらぬ時代に、すでに、ほのかながら五代の影響が及んでいる。

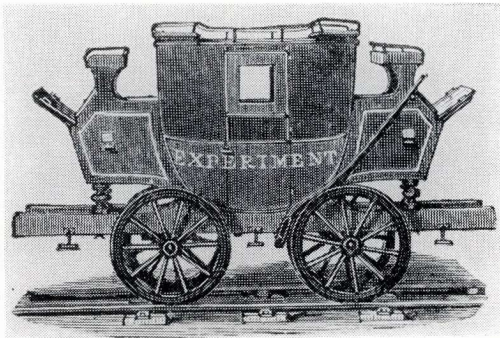
大阪と神戸間鉄道創業は、地元住民にとっては大きな驚きだったが、いわゆる経済の波及効果とあったものに大きな期待は寄せられなかった。さきにもふれたように、資材、機器いっさいを外国「イギリス」任せだったから、腕を拱いて見ているばかりだったのである。

大阪の場合、東京と事情の異なることが一つだけあった。東京と横浜間創業時には、国内に煉瓦の製造者がなかったため、国産の石材で代用することが多かった。それに引きかえ、大阪では堺方面に格好の粘土を産出し、和歌山方面から松薪の手当てができる見通しがあった。

たまたま、堺の大浜通りに旧幕府所属の函館物産会所があつて、これを鉄道寮が引きついで、ここに煉瓦製造所を開設することになった。時に明治三年某月で、地元の屋根瓦製造業丹治長蔵なるものを職工長に任命した。同時に、京都や兵庫方面から瓦職人を命令的に集め、お雇い外人が、これらに煉瓦の製造法を徹底的に教育することになった。明治五年、ここにはじめて煉瓦の国産がはじまったのである。十九年、東海道線起工に際し、同沿線に煉瓦工場が開設されたが、技術、設備仕様などすべて、この堺の工場の練磨が基礎になったという。官設の鉄道建設が直接の動機となつて発進した事業として特記されていい。わけて堺は、それから十数年後の阪堺鉄道の到着地点という因縁もあり、同工場製の製品が多量に使用されたと思われる。

ここで視野を広げて、世界の鉄道の発祥年次をふり返ってみると、ほぼ別表に見るとおりだ。上記したように、蒸気エンジンを産み出した国にふさわしく、その先頭を飾るのはむしろイギリスであるが、意外にもアメリカが第三位にくる。イギリスが、アメリカ開拓の主導力をにぎっていたことを証明する格好である。フランスが第二位であるが、当初レールその他の重要部材、器具、汽罐等はすべてイギリスに仰がねばならなかった。

一八二五年、イギリスに登場してから一八四〇年代にいたる間、ほぼヨーロッパ大陸諸国が鉄道



イギリスの一等客車エクスペリメント号  
一八二五年、ストックトンからダーリントン間を走行

世界主要国の鉄道創始一覧

国名	創始の年	国名	創始の年
イギリス	1825	アラブ連合	1854
フランス	1830	パナマ	1855
アメリカ	1831	ポルトガル	1856
ベルギー	1835	スウェーデン	1856
ドイツ	1835	トルコ	1856
カナダ	1836	アルゼンチン	1857
ソビエト連邦	1837	南アフリカ	1860
オーストリア	1838	パキスタン	1861
オランダ	1839	フィンランド	1862
イタリア	1839	ニュージーランド	1863
チェコスロバキア	1839	インドネシア	1864
イスイス	1844	スリランカ	1865
ポーランド	1845	ブルガリア	1866
ハンガリー	1846	ルーマニア	1869
ユーゴスラビア	1846	ギリシア	1869
デンマーク	1847	日本	1872
スペイン	1848	中国	1876
メキシコ	1850	ビルマ	1877
ペルー	1851	マレーシア	1885
チリ	1852	台湾	1891
インド	1853	フィリピン	1892
ブラジル	1854	タイ	1893
ルウェー	1854	韓国	1899
オーストラリア	1854		

日本鉄道協会『鉄道先人録』〔昭和47年10月〕

保有国になっている。その大半の国で保有者たるにふさわしく産業革命を完成していった。その場合、イギリスとは逆に鉄道が産業発達、商業振興のためのテコになったことが容易に推察される。

ついで、一八五〇年以降になると、ヨーロッパ周辺国あるいは東洋諸国さらには南半球方面へと鉄道進出地域の拡大が目立つ。明らかにヨーロッパ先進諸国の植民地拡大の息吹きが読みとれる。

インド、ジャワ、中国、フィリピン等アジア諸国と同列に日本を置いてみると、まさに植民地拡張主義者の虎口にさらされた姿を想像させる。さらに注目すべきことは、一八九六年〔明治二十九年〕の朝鮮に鉄道が敷設されたとき、早くも日本人が関与していることだ。当初アメリカ人が取得した敷設権を日本人の組合が譲り受け、京仁鉄道として発足したのである。この年は、日本とロシアの政府が朝鮮を両国の「保護下」に置く取り決めたときだが、京浜に鉄道が営業をはじめてから四半世紀を経ずして、反転、早くも外地への鉄道進出を試みていることは軽視できない。

そうした内外情勢に囲まれながら、アジアでもいわゆる極東地域で、世界ランク第四〇位ながら

日本が鉄道敷設ナンバー・ワンの地位を確保したことは、意味深い事実。一面、先進諸国の「鉄道売込隊」に対して交渉の任に当たった要路の大官たちが、ハンドルの持ち方を誤まれば「植民地鉄道」に一役買ったかも知れない状況下にあった。

### ぼっ興期の私鉄

明治十年代もその終末を迎えるころは、幣制改革を目的とした松方デフレもようやく実効を現わそうとしていた。当代日本の産業の近代化を象徴する大阪紡績も、デフレの最中に誕生したが、十分に生きぬくことができた。というより、創業早々から採算ベースに乗ったというから驚異であろう。それはまた地元の商業、産業の興隆を、物心両面から大いに刺激する効用もあった。

この大阪紡績の創設に当たっては、松本重太郎が、藤田傳三郎、渋沢栄一らとならんで深く関与、その初代社長に就任したことは、周知のとおりだ。近代企業の最高責任者となったことは、彼にとっでははじめての経験である。戸惑ったこともあっただろうが、先進国が持つ近代工業の威力を眼の当たりにしたことは、かけがえのない収穫であった。なにごとによらず進歩を信条としていた松本重太郎には、すべてが次のステップに役立つはずだった。

次のステップとは、阪堺鉄道にほかならない。片や製造業、片や運輸サービス提供業と、産業分類の上では異なる範疇としても、双方ともに相当の先行する設備投資を必要とすることに相違はない。限定された工場内に設置された一連の紡績機械セットに対し、野ざらしの地面にレールの敷かれた鉄道とは一見対比できぬような施設だ。しかし、どちらも価値を産み出すのに必要不可欠の手段である。単純な物品の仕入れ、そしてその販売によって利ザヤを稼ぐ商売とは、一線を画するこ

とを心得ていた。

重太郎にとっては、大阪紡績における資本主経営者としての実体験は、十分に貴重な教訓となった。会社設立に当たったの對外折衝（とくに許認可権を持つ対官庁）、近代企業の管理の仕方（総務、会計等の事務、人事管理等）など、実際に当たってみて修得することが多かった。重太郎自身、みずからの行動に一段の自信が加わってきた。しかし、世間一般の眼は、鉄道経営などというが、果たしてどんなものだろう、お上がやる仕事を、民間人がやってソロバンがとれるものだろうか、と幾分危ぶむ見方が大方であったに違いない。失敗でもすれば、それ見たことか、といわれるのはまず確かであった。ところが、フタをあけてみると、尻上がりに阪堺鉄道は、好業績をあげはじめた。

にわかに、お上の事業でない「大阪の阪堺鉄道」が評判になってきた。いまもむかしも変わらぬのは、他人の成功を見て、すばやく真似る向きの多いことである。阪堺鉄道の成功が弾みとなって各地に鉄道建設を出願するものが続出しはじめた。世にいう「鉄道ブーム」であるが、明治十九年ごろを起点にしている。『鉄道百年略史』によれば、十九年―六社、二十年―一社、二十一年―五社、二十二年―一五社と急増したことを注記している。阪堺鉄道が、活発に動きはじめるまでは、せいぜい年間一社くらいの出願しかなかった。

「しかし、その実態は投機による利潤の獲得を目ざすものが多く、建設の許可も受けず、株金の払込みもないのに株式の権利が売買されるという状態すらあらわれた。一八八五年から九二年（明治十八―二十五年）にかけて、計画五〇社、うち開発一四社という状態、また一八八七年から八九年（同二十―二十二年）にかけて計画資本総額五七〇〇万円、うち払込金額三〇〇万円という状態は、このことを示している」（原田勝正『鉄道の語る日本の近代』昭和五十八年六月）。

折りしも、東京方面では、井上馨（内務卿時代）の極端な欧化政策の見本「鹿鳴館」の満開時代であった。外国貴賓と日本の上流社会との社交場として開かれたが、浮わついた風潮をかもし出した

役割は小さくない。鉄道ブームも、そうした欧風化の空気の中の産物。放っておけば、いろいろと弊害がでてくる気配であった。当然のことながら、それを規制するべく、二十年（一八八七）五月十八日、「私設鉄道条例」が公布された。

規制の狙いは、企業体として健全な育成と事業設立そのものが投機の対象にならないようにすることであった。鉄道建設の出願に対して、甘い裁定による認可は許されるべきではない。たとえば、車両や鉄橋あるいは速度など安全性の基準を厳重にしなければ、健全な発達、運営は望めない。こうした規制が加えられて、いくらしないうちに、二十二年（一八八九）の凶作をキッカケとして、物価の下落とともに、株式の暴落に見舞われた。日本最初の資本主義的恐慌といわれるものだ。私鉄ブームはたちまち消失してしまった。

たしかに「私設鉄道条例」は、ブームに冷水をあびせた反面、官設鉄道とはまた一線を画しながらも、政府の監督を受ける一方、保護育成策が加えられたことを意味する。

## 関西での私鉄

私設鉄道条例の公布には、私鉄の中でも幹線になる路線について、何年かのちに国有化する含みがあった。それはまた、まさかのとき軍用鉄道に転用し得ることを、暗々裡に考えている形跡もあった。本来ならば、はじめから国有鉄道構想をもって臨みたいところだが、建設費が思うように調達できなかったからだ。基本的には、日本鉄道の父といわれる鉄道庁長官井上勝（一八四三～一九一〇）の構想でもあった。

やがて明治三十九年（一九〇六）三月、「鉄道国有法」の公布で、国家の鉄道政策が明確化され、国

## 鉄道ブーム

日清戦争（明治二十八～二十九年）の企業ブームに際して、鉄道熱が一段と高まり、「いわゆる権利株と唱うるもの証拠金二円に対して十数倍の株価を高めた」と、『大阪府誌 明治大正編』は記述している。

府下鉄道の敷設を出願した数は四〇余に及んだが、その十中八、九は却下された、という。

「……事業の成功せしものを挙げれば高野鉄道・南海鉄道・河内鉄道（旧河陽鉄道）・大阪馬車鉄道等少数のものに止まれり」（同上）

防上の比重が格段に加重した。いうまでもなく、アジア大陸への進出が、新興国日本の目前の課題になっていたのである。この大幅な鉄道の買収に当たって交付された膨大な国債は、民間企業の活況を生む副次的な効果もあった。

右様の事情を含んで、明治二十年以後の関西の鉄道事情をふり返ってみよう。『明治大正大阪市史・第三巻』の記述を参考にして以下に述べよう。阪堺鉄道のあとに続くようにして登場した八社で、そのほとんどが国有鉄道の仲間入りするが、それまでは私設鉄道条例の対象会社であったことはいうまでもない。

八社のうちから「南海鉄道」を除いたのは、いうまでもなく、後発の鉄道会社ながら、阪堺鉄道のいっさいの設備の継承者という関係から、別項で記述することにしたからである。

### 一、大阪鉄道

明治二十年（一八八七）一月、恒岡直史ほか一三名の発起人によって出願。計画路線は、大阪南区御蔵跡から大和高市郡今井町に至り、それ以東は、伊賀を経て四日市に達し、以南は五条町を経て和歌山に至り、以北は奈良に達する大阪・和歌山・奈良・三重の一府三県にまたがるものであった。たまたま、二か月おくれで発足した関西鉄道会社が、四日市、奈良等に路線計画を持っていることがわかり、出願中の敷設免許の修正が行われることになった。

開通路線を完成順にあげていくと、二十二年五月、湊町～柏原間、二十三年九月、柏原～亀瀬間、同十二月、王寺～奈良間、二十四年二月、稲葉山～王寺間、同三月、王寺～高田間。こえて二十六年、高田～桜井間、二十八年五月、天王寺～玉造間、同十月、玉造～大阪（梅田）間。

資本金も、発足時の一二〇万円が、二十六年には三〇〇万円と増加、業績も順調に発展してきたものの、営業区域で関西鉄道との競争がはげしく、ついに同社へ全財産を譲渡し、解散することになった。大株主片岡直温、小山健三らのあつ旋によるものだ。

## 二、関西鉄道

創立は明治二十年三月。願書による計西路線は大津と四日市間二五マイルで、将来は四日市と桑名を経て熱田に達する路線、伏見から奈良を経て大阪に達する路線等を出願していた。二十一年三月工事免許を得て、翌二十二年末に草津と三雲間、ついで二十三年に亀山と津間が開通した。二十六年には桑名と名古屋間を着工、二十八年に完了した。さらに三十二年には拓植と奈良間の路線を完成した。

これよりさき、浪速鉄道〔後述〕に属するいっさいの事業と物件を譲り受けたので、同社の全線を延長する免許を得ることになった。また、三十七年には、紀和鉄道、南和鉄道、奈良鉄道なども譲り受け、さきの大阪鉄道と合わせて、近畿二府・三県と中部の名古屋まで及ぶ近畿一の私鉄となった。

この規模拡大で、日露戦争前後には、大阪と名古屋間、国鉄東海道線との間で激烈な運賃・サービス競争が展開される始末。しかし、それも三十九年の鉄道国有法の公布によって、競争も夢ものがたり。最後まで、除外請願運動を続けたが、四十年十月には関西鉄道の歴史に終止符が打たれた。

なお、資本金は二十六年当時六五〇万円であったが、政府買収時には二四一八万一八〇〇円に及んでいた。

## 三、摂津鉄道

兵庫県伊丹町の小西壮二郎ほか一三名の発起で創立した「川辺馬車鉄道会社」が前身。創立は明治二十一年十一月。その後間もなく軽便鉄道に転換して、表記社名に改めた。路線は尼崎と伊丹と池田を結ぶ一線で二十六年に全通した。たまたま阪鶴鉄道〔後述〕の計画があり、三十年二月、設備いっさいを譲渡。

## 四、西成鉄道

明治二十六年出願の「川口鉄道」「西成鉄道」の一本化によって設立。二十七年六月発足。三十一年大阪と安治川間完成、さらに同年安治川口と桜島間を延長。三十九年末、鉄道国有法により買収されて大阪市民には国鉄「西成線」として長く親しまれてきた。

## 五、高野鉄道

明治二十六年十月、堺市北田豊三郎ほか七四名によって「堺橋鉄道株式会社」として発足した。資本

金は一五〇万円。堺市〔大小路〕から長野を経て和歌山県伊都郡橋本町に至る二二マイル〔三五キロ〕間で、二十七年六月に表記のとおり改称した。

工事は二十九年四月に着手し、三十一年一月、大小路と狭山間、同年三月狭山と長野間が開通した。三十三年八月には、道頓堀〔汐見橋〕と大小路間が開通して、念願の大阪へ進出することになった。その後、「高野登山鉄道株式会社」に鉄道付属物いっさいを譲渡。四十年十一月解散。

#### 六、浪速鉄道

大阪市北区相生町を起点、今福から讃良郡北条村〔現大東市〕の八マイルの路線をもって出願。現在の国鉄片町線といった方がわかり易い。明治二十八年、片町と四条畷間開通。当時、名古屋・桑名方面から奈良にまで及んだ関西鉄道は大阪入りを狙っており、ついに三十年二月、この浪速鉄道を買収して目的達成。大阪鉄道買収は、これより三年後であることは前記したとおり。

#### 七、阪鶴鉄道

三、の「摂津鉄道」でふれたように、大阪府西成郡曾根崎村を起点に、三田・篠山・柏原・福知山・綾部を経て舞鶴に達する八〇マイルの長距離の建設を申請した。設立は明治二十六年八月で、資本金は四〇〇万円であった。ところが、政府当局から、起点を神崎〔国鉄連絡駅〕にして三田と篠山間の六三マイルに改める旨の勧告があり、これに従うことになった。上記した摂津鉄道の譲り受けにつづいて池田と宝塚間四マイル五〇チェーンが開通、三十二年七月には、神崎から福知山まで全通。三十七年十月、官設鉄道の福知山と新舞鶴間二四マイル八チェーンの借用により、同年十一月から阪鶴鉄道の営業がはじまった。そして四十年に国有鉄道として買収されることになった。

この阪鶴鉄道の創立から完成まで十余年を経過しているが、その計画の推進者は、松本重太郎であった。彼の念願であった山陰と山陽を結ぶ鉄道の完成がやっと実現したわけだが、彼の心中には、おそらく生まれ故郷である丹後、あるいは丹波等、足回りの悪い地方の人びとへの贈物にしよう

うと考えていたに違いない。惜しむらくは全通開業の直前の三十七年六月、その首宰する百三十銀行がついに破綻、臨時休業せざるを得なくなったことは、後述する。

### 電気鉄道の発達

動力源が蒸気から電気変わった車両が出現したのは明治十二年(一八七九)にベルリンで開かれた工業博覧会に出品されたものが最初とされ、明治十四年(一八八二)にドイツで実用化されたという。

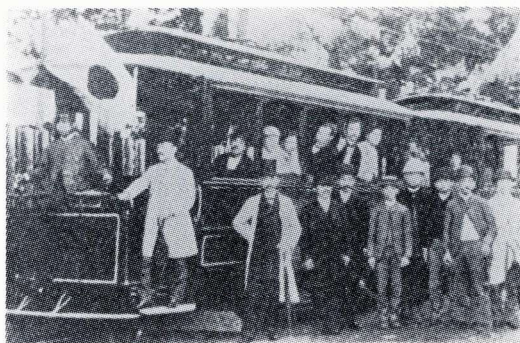
しかし、この電車は現在のように架線から電気を受けるのではなく蓄電池によって運転されていた。蓄電池そのものが完全なものでなく容量不足もあり、長時間運転ができず、馬車鉄道に代わって市内の短距離交通機関として運転された程度で間もなく中止された。

さて、わが国ではじめて電車が運転されたのは明治二十三年(一八九〇)五月から上野公園で開催された第三回内国勸業博覧会である。東京電燈技師長・藤岡市助がアメリカからスプレイグ式電車二台を輸入、博覧会場で一般客を乗せてみずから運転した。「煙の出ない汽車が走る」と汽車の伝来について世人を驚かせた。

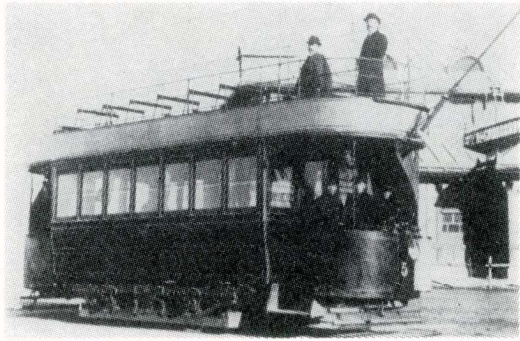
電車の実用性、快適さを目のあたりにした先進の実業家は、さっそく、電気鉄道を敷設すべく権利の獲得に奔走、東京はもとより名古屋、京都、広島など、ほぼ全国で相次いだ。

明治二十八年(一八九五)一月三十一日、京都電気鉄道(のちの京都市電)が、塩小路東洞院通(伏見町下油掛間)で、路面電車によるわが国初の電気鉄道を開業した。軌間一〇六七ミリ・単線架空式をとり、オープンデッキの四輪車であった。

この京都電気鉄道の開業は、折りしも岡崎公園で開催されていた第四回内国勸業博覧会を訪れる



わが国初の電車  
明治二十三年、上野公園で開催された  
第三回内国勸業博覧会に出席のわが国最  
初の電車



大阪市電

明治三十六年、築港棧橋と花園橋西詰間を走った大阪市電。二階付電車に注意

人びとの関心のマトとなった。

日本最初の電車の営業線となった京都電気鉄道は、京都の財界人が一八九二年（明治二十五年）に出願したのはじまる。これよりさきに一八八五年には琵琶湖の疎水工事がはじまっており、これに関係していた土木の権威田辺朔郎と実業家高木文平は、一八八八年アメリカを視察して水力発電を研究してきた。京都電燈の発起人となった中村栄助もその翌年アメリカへ出張して、当時リッチモンドで実用化されたばかりの電車を見学している。こうして前年の一八九四年には京都電気鉄道が創立され、工事が開始された。「中略」間もなく京都府から「電気鉄道取締規則」が公布されたが、混雑するところや夜間は電車の前に告知人を立てて走らなければならないといった規定があったことでこの規則は知られていく。疎水を利用した市営の蹴上発電所を動力源としていた関係上、毎月二度は水路の藻刈りのため停電で運休になったことも興味ある事実である。

〔鉄道ビクトリアル』人物と事件でつづる私鉄百年』和久田康雄〕

先陣を切った路面電車の開業は京都市の官民が一体となって実施した大事業の一つであった。その後、明治三十一年に名古屋電気鉄道（のちの名古屋市電）が開業し、翌三十二年には大師電気鉄道〔現 京浜急行大師線〕が、わが国初の「一四三・五ミリ軌間で開業した。以来、各地で開業されていくが、大阪では明治三十六年（一九〇三）九月、築港棧橋と花園橋西詰間が、わが国初の市営電車として、また最初の二階付電車〔明治四十四年廃止〕で開業した。

やがて、これまでの市内交通機関としての電車ではなく、都市間輸送にも電車が走るようになっていった。関東では京浜電気鉄道（旧 大師鉄道）がその先駆者となり、関西では阪神電気鉄道が最初である。阪神電気鉄道は、明治三十八年（一九〇五）四月、出入橋と三宮間を最新のボギー八輪車で開業した。

本格的な都市間輸送機関となった同電鉄は、阪神間に三四か所の停留場を設け、朝五時から夜一〇

時まで一二分間隔で運転された。また従来の街道筋に沿って線路が敷設されたので、当初の予想を上回る収入があり、明治七年五月に開業した官鉄〔現東海道線〕に少なからざる影響を及ぼした。

その後、関西では京阪電気鉄道、箕面有馬電気軌道〔現阪急電鉄〕、大阪電気軌道〔現近畿日本鉄道〕、兵庫電気軌道〔現山陽電鉄〕などが相次いで開業される。

一方、このころから既設の蒸気鉄道の電化が各地ではじまり、明治三十七年〔一九〇四〕八月に甲武鉄道〔現中央本線〕が飯田町～中野間の電化を完成させ電車の運転を開始した。これは蒸気鉄道から電気鉄道に変わった、わが国最初の電化である。

京都電気鉄道の開業から遅れること約一〇年の期間を要しているが、この間の事情を推察する一文を紹介しておこう。

#### 『鉄道講義要領』 関 一

……大要電気鉄道の利益とすべき点は、輸送の単位を小ならしめ、発車回数を増加するの容易なること及び加速度を得るの容易なるより発車停車を頻繁ならしめ得べき点に存す。されど斯の如く発車停車の頻繁なるがために速度の減少となり少しく長距離の場合には蒸気鉄道よりも遅きを免がれざると、運賃の上において蒸気鉄道は貨物運輸を兼ねるをもつて競争の餘力少なからざるの利益あり随て現今電気鉄道の営業の範囲は蒸気鉄道に比して狭小の傾ありといえども、其の将来の発達に至てはすこぶる有望にして鉄道業の研究者は此問題に関し種々の方面より常に注目を怠るべからざるなり

と、蒸気鉄道から電気鉄道への過渡期の状況を記している。

当時は一般に電気は普及しておらず、電気鉄道の開業、蒸気鉄道の電化にあたっては、その大半が自社で発電所を建設し、自前の電力を使用していた。そして余分の電力で沿線の電燈事業に進出、やがては大きな収入源となるのである。



後背地から見た丹後町  
左手前が旧間人町の集落

## 二、松本重太郎の人となり

### 生まれは奥丹後の漁村

松本重太郎の生まれた所は、丹後国竹野郡間人〔たいぎ〕村字小間〔こま〕である。昭和三十年〔一九五五〕、当時の間人町を中心に豊栄、竹野、上宇川、下宇川の四村と合併して京都府竹野郡丹後町となった。

丹波、丹後と重ねていわれることが多いが、かつては一つの国であった。といっても一千年以上も前のことで、大化改新〔六四五〕によって丹波国が誕生し、のち和銅六年〔七二三〕にそのうちの五郡を割いて丹後国〔たんばのみちしりへのくに〕が独立したのである。

簡略ながら要を得た教科書で、この地方の特徴を並べてみよう。教科書というのは、明治十七年五月、京都教育書房刊の『丹後地理要略』である。編集者は与謝郡宮津鶴賀町出身の山崎義丈。内容からみると中学校向け教科書かと思われる。これによると

〔丹後国ハ〕全国三方山ヲ負ヒ、其脈延キテ、國中ニ蔓リ、平地少シ。海岸ハ岬湾出入シテ、衆水悉ク北ニ流ル。土地肥瘦一ナラズ。又広坦ノ田野ニ乏シ。風俗ハ淳朴ニシテ狭固ヲ免レズ。海岸ハ漁網ヲ業トシ、山間ハ蚕織〔養蚕と絹織〕ヲ専ラトス。氣候ハ極暑九拾二度、極寒三拾五度ニシテ、冬時積雪五六尺ニ及ブ所アリ。

とあって、風土のきびしさがうかがえる。重太郎の出身地である間人については、わずかに港湾として間人港の名前があげられている程度で、まったくくわしい記述がない。

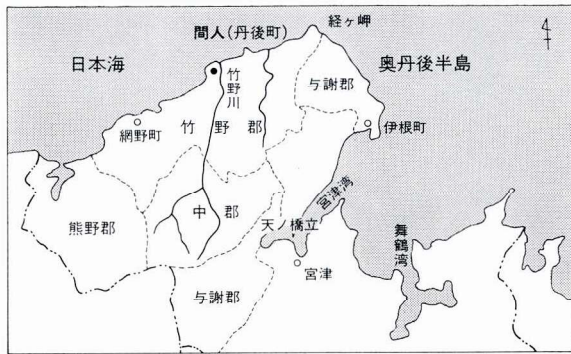
右の教科書より二〇年ほど後に公刊された『大日本管轄分地図』裏面解説記事をみると、

〔竹野郡内の〕東には間人港あり。此港風波を避くるに難し、良港といふべからず。とまことに手きびしい批評を加えている。



高野山常喜院藏





### 「間人」の名の由来

古くは大浜の里と呼ばれていたが、聖徳太子の生母である穴穂部間人（はしうど）皇后がこの地に御座所を設けて滞在した。やがて蘇我氏と物部氏の乱がおさまるまで滞在中、里人の手厚いもてなしに感謝して、退座のとき、この里を間人村と世々に伝えんと詠じられて以来、村名を間人、ただし読み方は「はしうど」は恐れ多いので、退座にちなんで「たいざ」としたと伝えられる。

最近でこそ、鉄道、バス網の発達、ことに丹後半島一周バスの開通（昭和三十七年）で、「奥丹後」の開発は進んだかに見えるものの、他方ではお定まりの過疎化が進んでいるのが偽りのない現状。

最近の事情はともかくとして、右にみたような自然条件からして、むかしは一家をあげて農業に打ちこむことは不可能であった。旧間人村ではほとんど水田耕作はなかったという。したがって地元に残ろうとする者は、漁業に従事するか、あるいは近在の網野、峰山で発達した丹後ちりめんに活路を求めねばならなかった。因みに、丹後織物は江戸中期に峰山の森田次郎兵衛が、西陣から持ち帰った技術といわれる。積雪の冬が長く、遊休労力を吸収するには格好の産業であった。湿度、気温その他の条件も加わって、この地方に織物業が盛んになったわけである。

丹後地方といえは、とかく後進地域と考えられがちだが、長い日本の歴史からみると、かつては大陸文化受け入れの表玄関に面していた。古墳、寺院等由緒ある遺跡の多く存在することがこれを雄弁に物語るものだ。むしろ、太平洋側が裏口であったといった方が正しい。大阪から奥羽、エゾ地に向かう北前船、菱垣回船の航路は、すべて日本海であった。世界的な流れ、ことに西欧諸国の東漸するに従って、次第に太平洋が表玄関になっていったといえる。

松本重太郎がこの世に生を享けたのは弘化元年（一八四四）辰十月五日であった。新暦では十一月十四日である。この年の三月にフランス船が琉球に、翌弘化二年には米船が浦賀へ、英船が琉球へと「黒船」がしきりと訪問をはじめていた。むろん、間人村の住民にはまったく関係のないことながら、目に見えぬところで時の潮は流れをげしく変えつつあった。

重太郎の生家は、代々亀右衛門を名乗る村では中堅的な家格であったようだ。五代目が彼の父で、母は美代といった。上記したように耕地面積の少ない所なので、いわゆる大地主は存在しなかった、と伝えられている。たしかに現地をたずねてみた印象からも、低い丘陵が海岸に迫るような格好で、わずかな斜面に山畑が拓かれていた。それこそ猫額の地に間人の街が集落していた。重太郎の兄妹は、五男五女の多人数で、彼はその第三子で次男であった。

はたして貧乏人の子沢山というべきか、そうでないかは別にして、たまたまこの亀右衛門家の菩提寺、龍雲

寺に赴いて過去帳をのぞいてみた。同寺は火災のため再建したようだが、過去帳は明治二十二年の作成とあるから、亀右衛門家に残っていた記録から転写したものと思われる。それによると、天保三年の冬から春先にかけて、かたまるように一族の四人が死亡している。うち二人は童子、童女とあり、他の一人は単に「亀右衛門」と記されているところから、四代目と見られる。天保三年〔八三三〕とは、史上に有名な天保飢饉のはじまったその年である。断定はできないが、夏場でない時分に、これほど死者がでるのは正常ではない。水稲収穫のないところ、突如としてやってきた飢饉。子沢山の家では並なみならぬ苦勞であった。

### 我家素ヨリ貧ニシテ

それから一〇年ほど経って生まれたのが重太郎、幼名を亀蔵と称した。その伝記は「翁幼ニシテ敏慧大志アリ。其広額ニシテ隼眼〔はやぶさのような眼〕、精悍ノ氣満面ニ横溢セル後年ノ雙軒翁ノ相貌ハ、又当年ノ頑童亀蔵君ヲ想見スルニ余リアリシヤ明ケシ」と精いっぱいこの修辭を加えている。

そのあとに続けて、おそらくは重太郎が後年述懐したであろうことばを基にして、父亀右衛門をして、次のようにいわせている。「汝長ズレバ当ニ別ニ一家ヲナスベキ身ナリ、然レドモ我家素ヨリ貧ニシテマタ汝ニ臚〔はなむけ〕スベキナシ、汝ソレ須ラク読書ト算術トヲ学ビ勉メテ怠ルナク、唯此ニ術ヲ以テ身ヲ立テ家ヲ起スベキノミ」と。むかし氣質のオヤジの精いっぱいこの言というべきだろう。

そのころ、村では村童の教育のために、宮津生まれ〔天保元年一八三〇〕の禅僧、大河内弘人なる人物を招き入れた。本村たった一軒の寺子屋の先生である。数え年二二歳のときに間人へやって来たそうだ。亀蔵が通い出したのは五、六歳くらいのことと思われる。亀右衛門のいうように、とにもかくにも実学本位なので、習ったものは、次のように極く標準的なものであった。

「今川」 南北朝時代の武将今川了俊が、応永十九年〔四二二〕二月、弟の仲秋に与えたという教訓書。これをタネ本にして江戸時代、子弟の教科書用に作製された。

「実語教」 作者不明だが、弘法大師作ともいわれている。平安時代末期、経書中の格言から抽きだし、



重太郎の父  
八〇歳を祝したときの松岡亀右衛門  
〔明治二十六年撮影〕

朗読できるようにした子供向けの読みもの。

「国盡し」 習字手習本をかねて、日本諸国の国名を並べ、称えやすいようにしたもの。

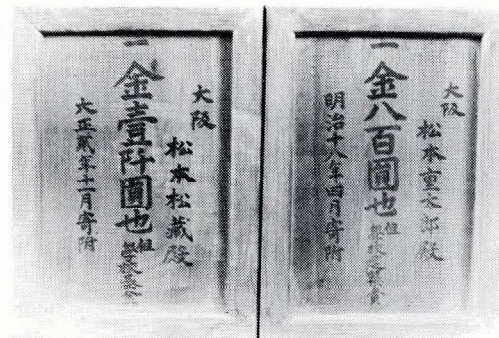
「商売往来」 当世風にいえば商売ハンドブック。江戸時代の商売に関する百科辞典。

寺子屋通いがはじまってみると、期待にそむかず、亀蔵は日に日に新知識を自分のものにしていった。大河内先生もびつくりするほど物覚えがよい。村中でも評判になるほどだった。

かねてからのオヤジのことごとおり、いずれは他国へ出ねばならぬ身の上。思い立ったら実行に移すこと早いに越したことはない。先生に習ったことと実際はどうなのか。いったい商売とはどんな風にするものなのか。見たいことやりたいことが頭の中にいろいろ湧くように出てくる。やっと九歳の春を迎えたころ、父の前におそろおそろまかり出て、みやこへ出させてくれと願っていた。いずれはと願っていたのが、こうも簡単に切りだされてみると、二の足を踏まざるを得ない。もう二、三年は家にいるものと思っていたに違いない。一〇歳にもならぬ子供にいわれて、いささか虚をつかれた思いであった。ちょっと待てといったものの、待たせる理由を考えねばならない。大河内先生に聞いてみれば、「学力優秀」の一語。読み書きの力がついたら、という条件を、すべてそろえているので、もう「ちょっと待て」はきかない。こんな年端のいかない子供の出郷は、現代の感覚からみると一見無謀な旅立ちにみえるが、明治末期くらいまで、さして珍しい話ではなかった。明治・大正時代、一代で名を成した財界人の中から、実例はいくらでも選び出せる。

### はるばる京へ上る

亀蔵にしても、家督を継ぐのは兄であることは決まりきった話で、次男の自分は旅に出ることもまた当然のこととしていた。土地の少ないところなので、村民には旅へ出るのがごくごく普通のことであった。そのうえ町に出た村の先輩たちの話を聞けば、なかなか刺激的でもある。たまりかねる思いで強くオヤジに二度、三度と出郷の願いを訴えた。「父君モ亦到底翁ノ志ヲ奪フベカラズヲ察シ、遂ニ其請ヲ許スニ及ビ、翁欣喜措ク所ヲ知ラズ、乃チ拵舞〔手<sup>べん</sup>を打って喜ぶ〕シテ家門ヲ辞シ、十歳ノ少年ノ身ヲ以テシテ、単身宮津、福知山等ノ駅路ヲ



寄付金の額  
 間人小学校に残る松本父子の寄付金受  
 領を表彰する額

経行程四十有余里遠ク京都ニ出タルゾ大胆ナル」と伝記は記している。嘉永六年（一八五三）春先のことである。ただし単身京都へ出たというのは、事実でない。いくら気丈な子供だといっても、たかだか一〇歳、子煩悩な亀右衛門がいきなり寒風の吹きすさぶ所へ突き出すはずはない。その間の事情を知るのは、旧間人村出身の松本淳（明治三十二年三月生まれ）である。この人も若くして出郷、京都、大阪の府庁吏員を経て、退職後、大阪府下黒鳥町に在住しているが、その人の直話によると次のとおりだ。

「木綿商をしていた祖父仁助が、たまたま京都へ出る便があるので、友人亀右衛門の件をあずかって連れて行こうということになった。そのころ、京都へ行くには、山越えに難渋する陸路より海路で宮津へ出るのが常識であった。間人の港を出て、丹後半島の北端・経ヶ岬を回って宮津へ向かう舟路である。それから福知山へと向かっていったらしい」。京都へ足を向けたのは、やはり同郷の出身で手広く商売している丹後屋宇兵衛方を頼つてのことであった。事情をいうと、どういうわけか「うちよりは五条通りにある呉服屋の菱屋勘七さんがよかろう」とみずから案内していつてくれた。ここで、はじめて他人さまの飯をいただくことになったのである。

なお、案内者の仁助も百姓の身分で、維新後に松本姓を名乗るが亀右衛門との間に姻戚関係はない。さて奉公先の菱屋勘七店での奉公ぶりは、なかなかよかった。骨身惜しまず働く亀蔵をみて、親方の菱屋勘七も大いに信頼を寄せるようになり、同輩とも折り合は悪くはなかった。まずはこれ平穏な日々、の連続であった。

かれこれ三年近くも下働きに明け暮れるうち、なんととはなしに今後のことが気になりだした。故郷を後にするとき、なんとかして大商人になってやろうという心づもりがあった。京都は、つづれの錦や西陣織など数多くの有名な織物を産している。しかし、その商いのことになると、噂ほどでもないことがわかってきた。職人になることを望んでいないから、少しばかり欲求不満の気分がわいてきた。どうにも京都は長居無用と考えるようになった。

## 反転志を新たに

少し早いめに出発すれば、日の暮れるまでにたどりつける大阪が目前にあった。寺子屋に通っていたころ、大阪は丹波の山波のはるか向こうにある、とてつもなく賑やかな町で、金さえあればなんでも買える所と教えられてきた。なんとかして、その大阪へと大きく心は波打った。いくらか、うそをいうことに心のとがめはあったが、病気のため「故郷へ帰る」と申し出てひまをもらい、主家を後にした。

『伝記』は、重太郎の奉公先の「菱屋ノ主人ニハ病氣ト称シテ暇ヲ請ヒ、奮然トシテ大阪ニ赴ケリ」と威勢のいい転進の決意の様子を記している。さらに節を改めて「海内〔国内〕何トナク騒然タリシ安政三年〔二八五六〕ノ秋、翁ハ満腔ノ雄志ヲ伏見ノ夜船ニ托シテ、濃江〔淀川〕ヲ下リ、黎明ニ及ビテ遂ニ其久恋ノ地タル大阪ノ人トハナレリ、時ニ以前京都ニ在リテ何呉レトナク庇護ヲ受ケタル丹後屋宇兵衛氏モ亦故アリテ此地ニ来リ居ラレシカバ、翁ハ再ビ此人ノアツ旋ヲ請ヒ、北区天満十丁目ナル呉服商綿屋利八方ニ雇ハルコトナリヌ」と筆を加えている。

いくら自主独往の気にあふれていた少年でも、一二か二三くらいの歳で奉公先の家を飛び出し、これといったあてもなしに、あこがれの土地へ行けるものかどうか。しかも、たどりついた先で、同郷の大先輩〔丹後屋宇兵衛〕にうまく会えて、またまた就職先をお願いする。少しばかりでき過ぎたはなしである。出世物語式の作文に類するものであろう。

みる人によれば些細なことかも知れぬが、松本重太郎が、宿願とした大阪へ転進していった動機を、いまい、いまいしておくわけにもいかない。これを打ち消すような事実が、重太郎の姻戚の一人の回想録によって明らかにされている。『松村家の人々』〔戸田宗吉 昭和四十六年八月 非売品〕がそれである。松村家は、重太郎が手がけた諸もろの事業とはほとんどかわりがないので、回想録の内容紹介は省くが、松村家の宗主真平が同郷〔竹野郡網野町〕の出身で、その妻ひさ〔安政四年 一八五七年生まれ〕は重太郎の妹〔五女〕に当たる。そしてその外孫が筆者の戸田宗吉である。戸田はまた、伯父に当たる松村真一郎〔元参議院議員〕の秘書を多年にわたって勤めた人物。

宗主真平は、重太郎の個人商店「丹重」〔後述〕発足間もないころ、同店に就職し、はじめは彼を主人としたが、前記したように後には義弟の関係となる。そうしたことから、孫に当たる戸田宗吉が、なにかと一門のほまれ「重太郎物語」を耳にするのは当然のことだろう。

『松村家の人々』の中で「……重太郎は若くして独立の希望に燃え、大志を抱いて郷閩を出で、まず京都で丁稚奉公の後、商業の中心地大阪に赴いた。すでに兄の亀右衛門が勤めていた天満の木綿問屋「綿利」〔わたり〕の店に入って、商売の手ほどきをうけた。」とある。

なんと本来ならば、問人にあつて家督を相続すべきはずであつた六代目の亀右衛門は弟より一足先に大阪へ出ていたのである。どういふ事情があつたか、『松村家の人々』は明らかにしていないが、年端のいかない重太郎にとっては、なにかにつけて、この上ない相談相手であつた。この兄の生涯については、くわしいことは解らぬが、妻を問人に残したまま、大阪で死去したらしい。松本重太郎の菩提寺である天王寺区の鳳林寺に葬られている。

そうした兄との関係はともかくとして、のちのち重太郎が、大阪で事業活動するのに、この上ない格好の場所をみつけたといえそうだ。

『伝記』は、綿利〔綿屋利八〕の所番地を当世風に「北区天満十丁目」と記しているが、最新地図にはむろん、明治の中期刊行のものにも記載がない。どうやら徳川期の地番らしい。天満十丁目とは、現在の天満橋の北詰の通りを基軸として、西の方に数えて十番目ということで、ちょうど現在の天神橋筋一丁目がこれに当たる。現在でも年輩者の中に天神橋筋一〇六丁目を「十丁目筋」という人が残っているが、実はここからでている。天満十丁目という番地は、明治五年ころに廃止され、その後、旧番地は復活しないまま、今日に至っている。この綿利の店に入ったのが、安政三年〔一八五六〕で、明治維新〔一八六八〕直前までの一二年間を、ここで勤めあげている。綿利といへば、「当時三井、大丸、小橋屋、恵比寿等ト相並ビテ、関西ニ於ケル太物問屋」〔木綿問屋トシテ有名〕〔伝記〕であつた。一三歳から二五歳まで、勤めた計算になる。商売の実科専門学校を首尾よく終えたようなものである。ところでこの間の元号の改元ぶりをみると、安政、万延、文久、元治、慶応、明治と六回も変わっている。深く詮索しなくとも、何とはなしに世情騒然の空気が伝わってくる印象だ。

そうした時世に、惑わされることもなく、一区切りの勤めを仕上げたことは十分に注視してよいだろう。職場そのものが、自身の理想とするところに近かったのではないかと推察される。それと同時に、綿利のあった地区が、なにか新興勢力的な活力を備えていたように思われる。

宮本又次『船場』〔昭和三十五年十二月〕によれば、「元和初年〔一六二五〕に船場の地に、東横堀以西の船場、下船場を合わして、これをいまの本町筋を境とし、北組、南組に分け、別に伏見組があったが、その後、伏見組は南北両組中に編入され、また新たに淀川の北に天満組が出来て、北・南・天満の三郷がととのったのである。」

北・南・天満の三郷それぞれ持ち味を備えた三つのゾーンだが、前二者は浪速商法の団塊の町という感じだが、川一つへだてた天満組といえは、青物市場があるかと思えば、また大小とりまぜていろいろな問屋が並んでいた。雑然として活気のある街であった。また天満の天神と同時に大塩平八郎の乱が頭に浮かぶ。

天保八年〔一八三七〕二月十九日、平八郎は自分の邸に火を放ち「救民」と大書したノボリを先頭に立てて行進を始めた。米価の高騰になやむ庶民の不平を代表して、元与力の大塩が門下生を引具しての決起である。「大塩平八郎は天満与力町を西へ進みながら、平生私曲のあるように思った与力の家々に大筒を打ち込ませて、夫婦町〔めうとまち〕の四辻から綿屋町を南へ折れた。それから天満宮の側を通って、天神橋へ掛った。」「森嶋外『大塩平八郎』。そのあと、天神橋を渡ろうとしたら、橋けたを引っぺがされて渡れない。方向を西へ振り難波橋を一挙に渡りきって、鴻池一族、天王寺屋五兵衛、平野屋五兵衛等の屋敷襲撃に向かう。

いいかえれば、十丁目筋を南下、難波橋を押し渡って船場へ攻めこんだというわけ。乱はその日の夕暮れに終末を迎えた。天満、北組方面の火災で一一二か町を焼失、三月二十七日、かくれ家で平八郎みずからも自殺して果てた。時の政府から逆賊として扱われ、大商人からは蛇蝎のようにきらわれたのも当然。しかし、一般民衆はひそかに大塩様と親愛感をもって呼んだという。

その大塩の乱の本場へ二〇年後、重太郎は綿利の店の小僧としてやって来たのである。周囲の人のほとんどが、その目撃者であった。火を放って南へ走りぬけて行く暴徒の話を、一再ならず聞かされたことであろう。不正なことをやっている役人、暴利をむさぼっている商人をやっつけようとしたのだ、という解説を何度なく聞いていたことだろう。だれもが大塩に対して畏敬の気持ちを抱いていた。川を一つ越えた天満は、実際に

そんな気風のただよう所であった。

しかし、日がたてば大塩の乱も昔語りになる。商人を志す身には、ちょっと縁遠い物語である。天満はやはり天満の天神さんであろう。日本三大祭りの一つといわれるだけに、なにかことあるたびに門前町は諸国の人たちの出入りで雑踏する。天満一の呉服屋を自負する綿利なので、文字どおり門前市をなす盛況。時は幕末のこと、藩兵の移動のたびごとに雑兵どもが店頭を群がって呉服を土産用として買っていくのであった。かれらの動きや話しぶりから全国の経済や政治の動きが身に伝わってくる。知らず知らずのうちに、商売とはどういうものか、次第に会得していった。

田舎育ちで体力には自信がある。かけ値なしに馬車馬のように働き続けた。そのころの丁稚奉公のおきては、身を粉にして主家のために働け、働けばそれに応じて身分も上がる、そのはては番頭、そして数年後に功労ありと認められれば暖簾分けがあつて、独立の時がくる。しかし、どこまでいっても主従関係の枠はずされなない。仮に一二、三歳で奉公に入ったとすれば、ざっと二四、五歳くらいまで小僧の生活が続く。それから手代に昇進するが、四十路のヤマがみえなければ番頭にはなれない。それも日々の勤めぶりをみて決められるのだから、皆が皆、番頭になれるわけでもない。いままむかしも変わらぬ年功序列型の宮仕えということだろう。

格別のヒキもなければ、オシもない重太郎は考え込む日が続いた。生き馬の目をぬくようなこの大阪に来て、同郷人の集まりがあるわけでもなく、これぞといった親身に相談相手になってくれる同輩もない。右せんか左せんか迷っても持つていくところがない。悩みというのは、郷関を出るときひそかな決意——いづれの日か、必ず大商人になって間人の人びとの前に姿を見せようと心に抱いていた夢。それがこのままでは、大阪の街の中に身を没してしまうのではないか……。

そこへ登場するのが、街の儒者・小田眞陽〔または澀陽〕である。名は堅、字は士好、通称英次郎といった。大阪でも高名の儒学者・藤沢東叡の門人で書家として天満では知られた存在であった。呉服店に住込んで、多少気分的に余裕ができたころをみはからって、小田先生の門をたくことになった。

先生は、奉公先の綿利からつい目と鼻の先、天満八丁目鳥居筋〔通称市の側〕に住んでいたので、重太郎は足繁く通うことができた。経書の素読と習字を学ぶためであった。国もとで、父の奨めではじめた「実語教」や

「国盡し」の延長線上の勉強であった。一四、五歳のころである。塾通いは七ツ時〔午前四時ごろ〕だから、店の仕事のはじまる前。夜は夜で、行灯の下で復習する。時には番頭から丁稚小僧に学問はいらぬ、金さえあれば、どんな偉い学者でも雇えるのではないかと皮肉たつぷりいわれたこともあった。しかし、そんなことは一向に無頓着な重太郎であった。

### いよいよ独立への第一歩

少し横道へそれたが、この小田眞陽に、身の進退についての相談にうかがった。眞陽は、常に向上心を以てすべてのことに処している重太郎の心中を察して、世情はまさに混沌、誰が明日の自分の身の安全を保証し得よう。自分がよいと思ったことは、実行するのが当然と、店を退くことに賛意を示してくれた。いいにくいことは私がいつてあげようと、小田眞陽は、直々に綿屋利八にかけ合ってくれた。正確な年月日は不明だが、伝記その他から推して慶応の末年と推察される。

自分で店を持つのは、それから二、三年後とみられるが、「綿利」勤めから自分の「店」を持つまでの間は、空中サーカスの放れ業を連想させる。

たしかに小僧から手代、そして番頭への声を聞くときは四十路——想像するだけでも長い道程である。小さい時から一本立ちを心がけていた重太郎にとっては、絶頂の番頭までいっても大して見栄えするようには思えなかったのだろう。そんな考えを起こさせたのも、身辺にひしひしと迫る時代変調の空気である。それを端的に示したのが「ええじゃないか」である。

慶応三年の夏、名古屋方面で発生した大衆運動。またたく間に東海道を上り、下りして江戸、京、大阪にまで広がった。「天からおふだ」が降ってきたり、夜昼なしに「ええじゃないかおどり」に踊り狂ったり、あるいは他人の家へ上がりこむ「おどりこみ」をしたり、さまざまな形で現われた一大民衆運動であった。マス・ヒステリアだという説があるかと思えば、一種の政治陰謀という見方もある。「大阪でも〔慶応三年〕九月から、降札があった。しかし、それは直ちにはええじゃないかの運動にはなっていない。十月十四日、慶喜の大政奉還

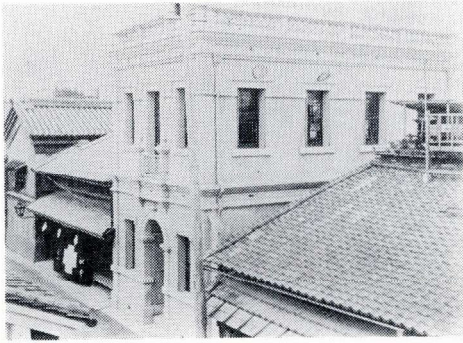
の上表があったが、その情報はいち早く、これらの都市に伝えられた。そして十月下旬になると、京都でも、大阪でも降札が増え、運動が激しく行われはじめたのである。」〔佐々木潤之介『世直し』岩波新書〕

大塩の乱で焼打ちに会った経験のある天満界限の商人たちは、この「ええじゃないか」がとんでもない方向に向かったあげく、またまた火の馬が走るのではないか、などと気をもんだことだろう。確実に徳川の威勢の落ちていくのが皮膚に伝わってくるようでもあった。重太郎は目のあたりに、この夜も昼も踊り狂う集団を見て、どうやら行きつくところに行くのではないか、と行ってどんな岸边につくか見当もつかなかったが、現状のままでは収まりそうもない気配を感じた。

『伝記』は、重太郎一本立ちのころの内外情勢をごく抽象的に述べている。「カクテ翁ハ其生涯ニ在リテ始メテ独立自営ノ衝ニ立テリ、時恰モ維新草創ノ際トテ国内諸所ニ起リシ干戈ハ全ク旧態ヲ一洗シテ一代ノ風潮ハ漸ク新ナラントシ、海外貿易ノ業モ亦将ニ大ニ興ラントスルノ秋ナリキ」と。

この字面からみるかぎり、新たな風潮を望んで、独立自営へ勇躍踏み出す印象だが、現実はいささか裏はらであった。慶応三年二八六七十月、徳川幕府は大政奉還の態度を明らかにしたが、なんとその翌年の一月、大阪城は炎上の憂目にあっている。鳥羽、伏見の戦いに幕府方はあえなく敗走、大阪城代〔幕府の職名 城を守る家臣代表〕も逃げてしまう始末。『大阪百年史』〔大阪府 昭和四十三年〕は、当時の市内の状況を「無頼の徒が横行して略奪をほしのままにし、市民は一日もやすんじて商業に従事することができなかった」と描写し、経済的な行きづまりの理由を次のように述べている。「そのうえ政府のとった経済政策は、江戸時代に「天下の台所」として繁栄した大阪の経済界を不況に陥らせるものが多かった。すなわち、銀目制度の廃止、御用金の調達、蔵屋敷の撤廃、株仲間解散、旧藩債の処分など、いずれの政策も大阪町人に大きな打撃を与えた」とし、その結果「明治十年ごろまで大阪の経済界は、まったく火の消えたようにさびれ、従来、富豪と呼ばれていた者の中にも倒産するものが多く、また倒産しないまでも、昔日のおもかげを失った者多数を数えた」といつている。

銀目制度の廃止ほか五つの経済政策の失敗についての詳細研究は、宮本又次『大阪商人・その土性骨のうつりかわり』〔中外書房 昭和四十三年〕にゆずるとして、そのいずれもが、大阪経済のど元を扼するような施策というより無策の連続という方が真実であった。五項目のどれをとっても、すべて直接、間接、金融経済に緊密



「丹重」  
明治二十五年ごろの平野町四丁目にあつた「丹重」のれんがけが発祥の店。手前の洋館は増築の事務所

な関連を持っており、大阪の経済動脈が分断されたにも等しいものであった。

したがって、伝記がいうような「一代ノ風潮ハ漸ク新ナラントシ」どころの騒ぎではなかったはずである。重太郎にとっては、おのが昔の独り立ちのころのことを省みて、ほこらし気に語るにたりるだけのスマートさにはなかつたはずである。

さて、綿屋利八の所を出て、はじめての商売は、わずかの元手をもって堺市に出かけ、木綿を仕入れて「行商ニ従事シタルナルガ、コレゾ翁ガ独立自営ノ商業ヲ営ミタル始メ」であった。いささかわびしい独立第一歩の踏み出し方であった。しかし、不退転の決意の固い重太郎は、次に輸入反物類の小仲立業「ブローカー」をはじめた。兵庫港の開港がもう目の前に控えている時分だ。みずから神戸の埠頭に出かけて取引がはじまつたけれど、商売繁昌の割りに儲けが薄い。それに、こうした仲立業といえは、人によっては「トンビ」と称して一段低くみる向きもあり、早々にして手を引いた。そうとしても、あまり外国語の素養もない重太郎が、身を挺して直接外国人に交渉するあたりの積極性は天性のものであったのか。

### 開店早々、福の神

そのころ、日本の若者たちは、新刊本『西洋事情』、『西洋案内』〔福沢諭吉〕を引っぱり合うようにして読んでいた。読書好きの重太郎も、ひそかにこれらベストセラーをふところに入れていたに違いない。一面、実社会に踏み出した第一歩が呉服店であり、自立したときに取り扱ったのがやはり木綿や反物の類。挑戦的な冒険心を発揮する一方で、足元を踏み外すまいとするかのように、未知の商品には手を出そうとしなかった。もっぱら反物類を中心にしたところは、用心深さと同時に、ある種の芯の強さを感じさせる。

ひとたび決心を固めたからには、あとはひたすら実行に移すのみと、早ばやと、船場の真ン中も真ン中、平野町四丁目にも商売の拠点を設立した。店名を「丹重」〔丹後出身の重太郎〕と称し、商標を「傘」とした。取り扱う品物は洋反物と雑貨類。のちに重太郎は述懐している。

店ハ借りタガ間口二間半ノ手狭ナモノデ、ソノ上大和屋半兵衛トイフ人カラ借りタ三百両ノ金ハ全部店ノ

改築ニ費ヒ、品物ヲ買入レル資金が無クナッタノデ、又五百兩ノ借増ヲシ、ヤット看板ヲ掲ゲルコトガ出来タ。〔伝記〕

これだけ読めばまったく無謀に近い店開きの印象である。それに重太郎は弁舌がさわやかであったようでもない。むしろ訥弁に近かった。また、これぞといった担保物件もなしに金を借り、家を借りることができたのも、やはりその人柄を買われたからに違いない。大阪の一流の呉服店で、小僧修業を一〇年余、多少は人にも知られるようになっていた。いわば目に見えぬながしかの信用ある青年になっていたのである。

とにもかくにも必死になって、なにかに賭ける思いでいっぱいであった。さきに「ええじゃないか」運動を引き合いにだしたが、混乱した世情はなおとどまるところを知らなかった。

時は明治三年九月〔旧暦〕、維新の動乱の熱気の余温がまだ市中に溢れているころだ。新政府は、なにはさておいても、統一国家としての体制の確立を急がねばならなかった。といって、新政府の台所は火の車。その欠を賄うため、同時に農商の殖産興業を図る目的をもって政府紙幣の発行を行うことになった。通称金札、正式には太政官札と称する日本最初の政府紙幣であった。不換紙幣であったため、最初から正貨に対し二割強の打歩がついていた。前記した重太郎の両表示の借金はまさにこの太政官札であった。

大戦争の後や社会体制変革のあと、異常な通貨膨張の起こることは、今もむかしも変わりはない。幕末から明治初年にかけての丁稚奉公、その後の短い独立の生活の間に、重太郎は、はげしく通貨価値の下落する情況をいやというほど目の前に見てきた。いたるところに、思惑買いの商機を見ることができたのである。元入れ資本三〇〇兩や五〇〇兩などは、モノの数ではないといった態度の度胸ができていた。

はじめて京都の呉服店へ奉公してから一五年の歳月を経過している。二五歳といえ、まだ青くさい年齢かも知れぬが、激しく流動する社会情勢に敏捷に対応するには十分に余裕のある歳になっていた。

彼の周囲にいた連中の眼には恐らく、「できる若者」として映ったに違いない。

右にみた諸もろの措置は、旧体制に安住していた大阪商人の生活を根本的に揺がすものであった。かつては進取の代表といわれた一連の豪商たちも、あえなく姿を消していった。お家の安泰を図るべきはずの保守主義が、皮肉にも時代の進運に適合してゆけなくなった結果である。むろん、カジ取りのうまさまで没落を免れ、み

商工業内『浪華の魁』

明治十五年一月刊の商工業内『浪華の魁』中に掲載の「舶来反物商・松本重太郎」の名前。現在は、東海銀行ビルの敷地内になっており、往時をしのぶすべもない。

上野清兵衛 <small>代官町 通 尾張橋 東 江 入</small>	諸置来實小澤喜兵衛 <small>淡路町 通 新 東 江 入</small>	盟表卸商小林久右衛門 <small>北 濱 町 丁 目</small>	因置表商清水勇治郎 <small>天神橋通高倉橋角</small>	竹仲買商片山庄治郎 <small>東 堤 村 小 町</small>	新築建具商中山新七 <small>井 池 通 尾 張 橋 東 江 入</small>	船木及物商松本重太郎 <small>心 寄 橋 通 平 野 町 東 江 入</small>	羽足袋卸商藤田庄七 <small>北 久 宝 寺 平 通 尾 張 橋 東 江 入</small>
---	---	--	--------------------------------------	---------------------------------------	---	--	---

ごとに新時代にサオ差していった商家もある。世の中の仕組みが大改革されたのであるから、新旧勢力が交替するのは当然のことであろう。

松本重太郎が、大阪は船場の一等地へ間口小なりとはいえ、店舗を構えたことは、おのれの面に責任を持ったことを意味する。まさにトンビの時代の終わったことを自覚した。

そこで店舗を構えた場所へもう一度戻って見よう。大阪流にいえば、たしかにヤマコを張った船場進出。それも市内の名だたる店舗の並ぶ平野町界限とあっては、やはり注視に値する。そのころ平野町一丁目には、五代友厚が居を構えていた。明治三年当時、善左衛門町といったが、同五年の町名の分合改称によって平野町四丁目に改められた。

それまでは、東横堀川西岸から、西へ一〜三丁目まであったのを、四〜五丁目まで延長、現在もその町名は残っている。「丹重」の店はこの平野町通りではなく、その四丁目が南北に走る心斎橋筋を数軒北へ入ったところであった。現在、その場所には東海銀行大阪支店のビルが建っており、今はむかしを偲ぶよすがもない。

この「丹重」の店とい目と鼻の先に、江戸時代の「北組惣会所」「町人の自治組織の本館」があり、のちに「懐徳堂」の学舎、さらに料亭「界卯楼」がここへ移転している。この料亭は同じ町内の松本重太郎が、やがて財界活動に乗り出すようになってから、商工業者のサロンとして利用、大いにひきたてられることとなった。その後、大正、昭和と繁昌をつづける基礎を作る陰徳を施したといえそうだ。

思いきって振ったサイコロはうまく転んで、「丹重」の信用はしだいに高まってくるが、信用を第一とする大阪商人仲間では、やはり場所の選定がその大きな要素。船場のド真中にいることは、目に見えない大きな圧力となるのだろう。洋反物雑貨商数年の経験だけで、一〇年を経ずして銀行屋へ飛躍し得たことは、やはりこの平野町に居を移していたからだ。

かつて大塩平八郎は、川向こうの天満から難波橋を渡ってこの船場に攻め込んできた。その配下から密通者がたため、計画をくりあげて進撃をはじめたが、すこぶる絶望的な蜂起であった。それに対して同じように、天満から川越えてやってきた重太郎の胸の内には、限らない夢と希望があった。

はてさてと思索する間もなく、店を構えてはじめての仕事がみつかった。明治四年の「散髪・磨刀令」にか



壮年時代の松本重太郎  
〔年代不詳〕

らまるものである。つまり、チョンマゲを落とし、刀を差すことを止めにする法令である。文明開化の一つの見本である。重太郎が、商用でたまたま神戸に赴いていたとき、京都府知事の植村正直が散髪令を出したというのを小耳にはさんだ。外人相手に商売をしてきた手前、散髪すれば外国人なみに帽子もかぶらなければならぬし、頸巻も必要になるはず。善は急げと、停泊中の外国船「オルゴニヤ」号に乗せてもらって、夜行便で長崎へ向かった。外国の商人の群がる長崎へ行けば、目標の帽子や頸巻が手に入るというもくろみ。

さて、船中に夜明けを迎えキャビンを眺め回していると、なんと同じ考え方をする同業の者が一三人もいることがわかった。大体、たくさんの人間がいても、その考えることにさして大きな差異はない。重太郎は、一瞬これはしまったと思っただけで、反転奇策を考えついた。

そのいわく「お見かけするところ、皆さんの考えと目的は、まったく同じことと拝見した。ここで、おれが、おれが、ではかえって外国の商人たちに足もとをみられる。結果は高くても悪いものをつかまされること必定。どうだろう、二手に分けて長崎の市中はもとより、大浦、出島辺にいたるまで買い占めに回ってみようじゃないか」と提案した。悪かろうはずがない。ただちに実行に移し、現品を船積みして大阪の川口に帰って来た。それから先はいうまでのこともない。ハネがはえて飛ぶように売れて、重太郎は開店一年後に思わぬ儲けに成功したのである。

しかし、よいことづくめというわけにもいかない。ここへ移って三、四年後の明治七年には、征台の役というちょっとした紛争が台湾で起こった。日本の漂流民を現地人が虐殺したというのが口実。西郷従道が政府使で台湾へ乗りこんだ。出兵ということになればたちまち軍用毛布が入り用になる。ご用達の商社は「先収社」と称した。井上馨の経営にかかる会社である。井上馨（一八三五～一九一五）といえは、長州藩出身の政治家であると同時に、のちには三井の実質上の大番頭といわれたほどの人物。幕末のころ、藩令によって伊藤博文らと英国に留学、政府参与となり大蔵大輔になったのを手初めに官界に入るが、その片手間に先収社を経営する両刀使い。軍用毛布売り込み当時、大阪商人としては、かけ出し同然の重太郎にとっては雲の上の存在だった。井上馨が、なにかと面倒をみていたのが同郷の後輩・藤田傳三郎であること天下公知の事実だった。軍用靴のご用達を承っていた関係で、このころ、重太郎と、なんらかの往来が始まったものと推定される。ふしぎなほ

ど両者の巡り合い、あるいは往来など、まったく私的な記録は残っていない。のちに少なからぬ事業会社の設立あるいは経営に協同することに照らし合わせても、意外の感を深くする。

そうした有力な売り込み先を見つけたものの、神戸方面で一年間に買い集めた軍用毛布は、品質すこぶる粗悪なものだった。どこへもっていても体よく断わられてしまった。あの手、この手とねばりにねばったが、ものにならず、今度は神戸在住の外人に売り渡して、大損になるところをいくらか軽くすることでやっと危機の脱出を図ることができた。

### 馬上洋服姿の岩崎弥太郎

松本重太郎は、書画骨董の目ききで、茶の湯などでもなかなかの趣味人だったらしい。その方面で逸話めいたものがあるかといえは、まったくといっていいほど残っていない。みずからも語っていないし、周辺にいた人びとの重太郎を話題にした逸文めいたものも見当たらなかった。

おそろしく生まじめで、日常は寡黙で通っていたので、はなしのつけ入るスキがなかったのかも知れない。とはいえ、明治中期の諸もろの産業がぼっ興するさ中、数にして四〇近くの事業にかかわりを持ったのであるから、人間往来だけをとっても、「取っておきのはなし」があったに違いない。

そんな中で、珍しくも岩崎弥太郎「一八三四〜一八八五」についての「思い出」を、側近に語ったのが『伝記』の中に収録されている。かいつまんでいうと、次のとおりだ。

岩崎弥太郎が「土佐藩の借入方」をしていたときというから、明治の初年である。土佐藩がいよいよ有栖川宮熾仁親王について江戸へ進発することになった。京都・大阪で軍用金を調達するため、弥太郎がその「借入方」―徴発人として引っぱり出されたのである。土佐安芸郡井口村の一郷土の大拔擢である。この拔擢は一見格好はいいが、平たくいえば弥太郎を使って、火の車の土佐藩台所をうまく切り回して、軍用金をヒネり出させようという算段であった。

このはなしは続けられきりがないが、ちょうどそのころ、松本重太郎は、連日のように阪神間を往来してい

た。別項でも述べた平野町四丁目に店を構えようとしたところである。『伝記』は、重太郎の談話を、次のようにまとめている。

「縞ノ羽織ニ前垂掛ノ姿ニテ、常ノ如ク神戸埠頭ニ赴キタルニ、会々〔たまたま〕岩崎氏ノ不恰好ナル鶉色〔うずらいろ〕ノ洋服ヲ纏ヒテ騎馬シテ来ルアリ」

この洋服を着た人物が外ならぬ岩崎弥太郎その人である。そのころ洋服姿なるものは、ほんとうに珍しかったのであるが、どうやら弥太郎の洋服姿はあまり似合わなかったようである。というのも、弥太郎の長崎時代に、ある女性が弥太郎の洋服姿をみて笑ったことがあるという。以後、大財閥の鼻祖も洋服を着用することがまれになったという。

その弥太郎、馬上から松本に向かって、西洋ろうそくの見本をかざし、

「ナア、丹重サン、コレガ私ノ手許ニ百六十函モアツテ、持チアグンデオルノデ、一ツ買フテ下サランカ」トノ話ニ、翁モ立チタルママ「イクラデモヒキウケマスヨ」

と答えて、ただちに取引きしたという。

弥太郎が、大阪で「土佐商会」なる貿易会社を開いていたころのはなしである。珍しくも「岩崎男〔爵〕モ昔ハ見スボランイ男デアッタ」と述懐している。重太郎が、長崎の女性についての予備知識があったわけでもない。突如、馬に乗った岩崎弥太郎が眼前に現われたのである。しかも平素見馴れぬ洋服姿――。よほどその洋服姿が珍奇に映ったものと思われる。

これもまた日時がはっきりしないのだが、このころ、身分的な差別の撤廃が行われ、旧士族の農・工・商に従事する人びとの結婚障壁が取り払われた。埼玉の忍〔おし〕藩の京都留守居役牧勝の息女浜が、重太郎のところへ興入れすることになった。だが、どこで、どういういきさつで、婚姻の話をまとめあげていったか、いっさい不明だ。忍藩は徳川派の貧乏藩、しかもその出先きとあっては諸事不都合であった。そこへ新興成金の重太郎が有力候補で登場という次第。いくらかの摩擦があったと思われるが、間人出身の古老の間では、浜夫人の人氣はもう一つといった感がある。終生、「表敬訪問」しなかったということが、いろいろ伝えられた結果のことだろう。しかし賢夫人だったことは、地元の人也十分以上に認めるところで、いうなれば畏敬され



叙位祝賀の日の重太郎と浜夫人  
明治二十五年ごろと推定される。

る婦人ということだろう。

浜は弘化二年（一八四五）の生まれで、重太郎より一歳年下。娘盛りのころ、藩主松平隠岐守の奥女中として仕え、廃藩置県を機に京都の父の所へやって来た。したがって重太郎との結婚は明治四、五、六年ごろということになる。

武士の娘だけに、武芸の内でも長刀なまなにはとくに練達していたそうだが、行儀はまた格別に正しく、半日くらいは正坐不動のままだったという。それだけに側近の者に対するシツケはきびしかったそうだが、といって堅いばかりでもなく、花札で遊んだり、遊芸人を呼んでいろいろな芸事をして楽しんだりする余裕もあったそうだ。

重太郎の社会的地位の向上につれて、社会的な活動——たとえば「大阪愛国婦人会」の結成に当たっては、その会長を勤めたり、福祉関係の方面にも参加した様子だ。側近の語り伝えによれば、家庭にあっては、婦唱夫随で琴瑟相和するふうであったという。晩年は養子虎吉が住んでいた京都南禅寺近くに居をかまえ、そこで生を終えた。没年は大正十四年（一九二五）十二月二十二日であった。

### 商機逸すべからず

維新の大業は、緒についたとはいえ、終局的にはどの辺りにおちつくか、当事者の目にも明らかではなかった。かれらは事を行うに、まず先立つものに苦渋した。徴税を凶ろうとしても十分な権力をにぎっていたとはいい難かった。国民の側でもまた、さきに徳川幕政下の大徴税に悩まされたあとで、強圧的な取り立てにも応じかねるというのが実情だった。大商人といえどもふところ勘定は大方底の見える情況にあった。少なくとも、維新後の一ケタ時代（一八六八～一八七〇）は、明治政府にとっては一番に苦しい時であった。

よきにつけ悪しきにつけ、その総決算を迫る役目を果たしたのが、世にいう「西南の役」であった。明らか  
に内乱であるが、戦前には一般に西南戦争と呼ばれた。内乱の規模の大きさと国民的な関心を示すものであった。事実、この西南の役のあと、各地に騒乱があつたけれど西郷隆盛ほどの人物が現われず、その規模もはる



松本重太郎

かに小規模となる。

この内乱に際して松本重太郎は、格別の行動に出たわけではない。それまで、修業を重ねてきた商人として、商品の売買による利ザヤ稼ぎを行ったに過ぎない。ただ、ケタはずれの利益を得たことは事実である。それだけに、相当の投機的な覚悟で臨んだ。

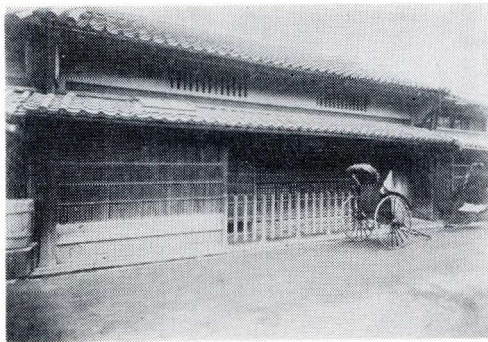
その間の事情を『伝記』作者は次のように記録している。明治十年ごろ、重太郎は神戸、横浜、長崎などの開港場を往来して、舶来雑貨、ラシャ類などを仕入れて、国内の洋品店や洋反物店にこれらを販売していた。ある日のこと、神戸で取引先のある外人と面談していたとき、妙な地図を持っていることに気付いた。一見すると単純な絵のようだが、仔細に点検すると、軍事地図である。

要所、要所に小旗などが描かれ、赤や黒のインキで、ていねいに区画を印したそばには、距離、兵員それに時間数などが書きこんである。カンの鋭い重太郎は、これぞ風の便りが運んでくる南九州の拳兵の早耳情報の絵図と読んだ。その外人の問わず語りに耳を傾けると「ココが賊軍、ココが官軍ノ最前戦」となかなかにくい。

その外人は、なにか胸算用があつてのことか「モハヤゴ覽ノ通りノ戦況ナレバ、官軍ノ方ハイマハ不利ノ形勢ダガ、戦争ハムシロ今後ノ発展ニ期待サレル。士氣ノ挽回ハコレカラダ」という見立てである。

その「外人」については、氏素性はもとより姓名など具体的には何も注記されていない。いずれは植民地を転々と渡り歩いてきた青い眼の商人に違いない。しかし周到な軍用地図を用意しているあたりは、並みの商人ではない。すばやくこれに反応した重太郎は、「商人ノ飛躍ハ今ニ於テ又アルベカラズ、宜シク軍用羅紗ノ買占ヲ行ヒ、運命ヲ一挙ニ決スルモ、亦豈〔あに〕男子ノ本懐ナラザランヤ」と決意を新たにされた。

あとは実行のみ、「全店員ヲ京都ニ召集シ」たのである。全店員といっても、せいぜい一〇人止まりだろうが、神戸からいきなり京都へ店員に集合をかけたのはなぜだろうか。これは、官軍いや政府の首脳が、たまたま京都に入浴していたからである。くわしくいえば、その年の一月は、先考孝明天皇の一〇年祭で、明治天皇につき従って、有栖川宮、三条実美、木戸孝允、伊藤博文、山縣有朋など側近のおエラ方が滞在中であった。政府側情報の集中とその対応の様子がいながらにして一夜のうちに明らかになるだろうと、重太郎は推察した



明治二十五年ころの平野町四丁目の松本重太郎本宅。

のである。

その気迫を感応した店員は、情報の収集、交換を終えると店主ともども大阪へ取って返した。そしてただちに大阪市内の各ラッシャ店の在庫量を調べあげてすべてを買い取ることを約定したのである。数日を経ぬ間に大阪市内のラッシャ類のほとんどが重太郎の掌中のもとなった。

どこで会得したのか、特定情報の入手とそれに対応する電光石火の身の処し方。人によっては努力の賜物、あるいはすべてこれ資質の現われというが、それぞれが要素であって、すべてではない。二つの要素が時の運と相まって結実したと解すべきだろう。

ところで、この大胆きわまるラッシャの買い占めは、たしかに大成功ではあったものの、一面大失敗でもあった。というのは、商品のうち優良品は、またたく間に売りつくされたが、全体の約三割が箸にも棒にもかからぬ劣悪品。これには、強気の重太郎も弱りきった。思い余って、そのころ、すでに押しも押されもしない政府の御用達であった藤田組、大倉組に相談に行った。見るからに粗悪品とあっては、商談になるどころの騒ぎではない。体よくことわられる始末。やむなくこれを抱いたまま、つぎの機会を待つことになった。

西郷軍と官軍との対決は、何人の目にも容易ならぬものとして映った。と同時に規模の拡大がさけられぬものとみられた。西郷軍には、名だたる旧士族連が作戦指導、兵力も旧藩士で構成されているのに対し、官軍側はすべて徴兵令によって駆り出された「人民軍」。官軍側は意地にも百姓兵の強いところを天下に誇示する意図もあった。徴兵令によれば、平時三万六八一〇人、戦時四万六三五〇人と定められていたのに、なんと西南戦争では四万六三五〇人（ほかに海軍、臨時徴募兵等約九〇〇〇人）に及んだ。これに対する西郷軍は四万人余（九州一円の旧藩士たち）であったから、大戦争であったことに相違ない。八か月に及んだ内乱の国費は総計四五〇〇万円余といわれるが、当時の一般会計の規模が六〇〇〇万円台だったから、国の台所を十分以上に脅かす要素もつものであった。

そうした政府の方針に対し、反乱軍は大きな賭けをいどんだわけだが、当初雲行き怪し気だった官軍の退勢を一気に盛り返す機会がやってきた。旧藩規準でいえば、紀州、会津、水戸などから徴兵された兵隊に、史上でも有名な抜刀隊（士族などからの徴募）が動員されることになった。かれらは、応急的に軽装の軍服を身につけて

いたが、雨具にもなる外套類の支給をうけていなかった。京都、大阪に立ち寄った部隊が外套を購入しようとしたが、街のランチャ屋の手には一品もない。市場の原反を買い占めていた重太郎の店に、業者が殺倒、昨日まで思惑はすれに消沈していた気分を一挙に吹きとばす始末になった。いつの時代でも需給バランスを失えば、成立つ価格も常識の外。実額は不明だが、とにもかくにもケタ外れの巨利を懐中したのである。

ところで、『伝記』は重太郎が行った訓戒を記録している。齡三三歳にして、「このバランス感覚」といいたいほどの言である。そのいわく、

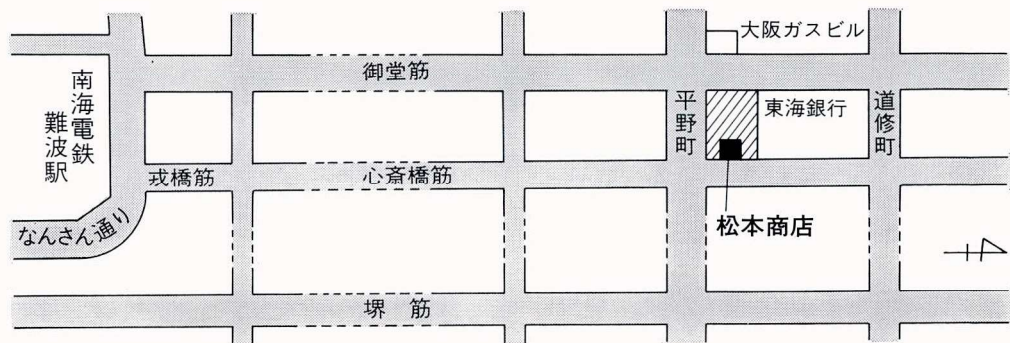
「今回の大儲けは、わたしの商略が適中したからではない。まったくのまぐれ当たりがさせたものにすぎない。むかしから、戦争になれば、物価というものは、梅ぼし、わらじの類にいたるまで、二倍にも五倍にもなるのが常である。たまたま、今回巨利を博したからといって、おごった心を持つてはならない。諸君らは、むしろ逆に心を引きしめるべきであろう。世間でよくいう、『勝ってカブトの緒を締めよ』とは、まさにわれわれ商人が、しっかり心に刻みつけて守らねばならぬことばであろう。」「伝記」

この戒めのことばは、むしろみずからに課したものであった。その後の「財界活動」の跡をみると、このことが如実に証明される。いいかえると、維新後の一〇年間は、徹頭徹尾といってよいほど、政情不安（経済不安）の綾目あやめを縫うように投機商売に身を投じていた。ところが、西南戦争を舞台にした大投機を最後に、利ザヤ稼ぎ的な行き方を根本的に改めたのである。明治二ケタ代になってからの「商売替え」をみれば、ことばを加える必要はない。

その大方向転換を示すように、上記の店員に訓戒のことばを残して、翌朝、「妻孥ヲ伴ヒ」一陣の風に乗って但馬の国は城崎に遊び、一か月ほど英気を養ったという。『伝記』は妻孥をつれてと記しているが、孥は子供と下女の二義があり、この場合は後者を指すものと思われる。

重太郎が宿願としていた都心への進出計画は、見事に成功を収めたものの、準備万端すべて整った中での実行ではない。

後述する第三百十国立銀行の本店は「丹重」の店から徒歩でもの数分もかからぬ高麗橋三丁目、井池筋の角（現安田銀行）であった。機器による通信交通機関の未発達時代である。商売の上で「店の間」と「奥の間」



が離ればなれになっていることは、とうてい許されぬことであった。事業経営の責任者は、つねに職場に近いところにいるのが、最も望ましいことであった。明治二十年ごろまでの大阪財界の指導者たちは、船場島之内辺に居住し、職場もまたほとんどこの地域内に集中していた。そうした環境の下に、「丹重」を基地に重太郎は事業の根を深くおろし、広く張っていかうとした。

そういえば、彼が設定した基地「丹重」が面していた心齋橋筋をはるか南下すれば、戎橋筋と一直線に結び、さらにその南端が南区難波五丁目で、今も昔も変わりのない南海電鉄のターミナル。「丹重」の店を開いたとき、重太郎の脳裡には鉄道の幻影などひとかけらなかつたであろう。それに、まさか、はじめて自前で開設した店から真つすぐ南へ行き当たったところが、やがてわが生涯最大の事業の場となることなぞユメにも思ってみたことがなかつたはずである。

### 第三百三十国立銀行設立に一役を買う

城崎の遊行から帰阪したころ、西郷軍による熊本城の重囲はすでに解かれ、鹿児島城山で西郷はみずからの命を絶っていた。民心は戦乱に完全に飽きていた。重太郎は、潮の流れの変わるのを敏感に捕えた。商業の都、大阪にも水面下に新しい動きのあるのが察しられた。西南の役に際し、平野町に「丹重あり」の声が商人の間で高いことを知ると同時に、彼自身ひそかに期するところがあった。『伝記』は彼の心境を次のように伝えている。

「西南の役で」ようやく財産を作ることができた。これからは、自分一個のことだけを考えることを止めて、国家のために全力をつくさねばならない。むやみやたらに、群小の商人たちと、一銭一厘の利を争うようなことはほめられることではないし、われわれ男子として恥ずかしいことである。

おそらくは、何年か経過して後の回想的な発言に違いない。いくらか整理された作文的表現のキラキがある。とはいえ、関西風という「トンビ」式のブローカー商売に対する決別の決意のほどが、右のことばの中にかがえる。



明治二十五年ごろの第百三十国立銀行  
本店（高麗橋三丁目）

その第一歩は、第百三十国立銀行設立へ非常な熱意をもって参画したことである。いかに蓄財できたとしても、個人商店で終始しておればそれまでのこと。ところが、公共性をもった銀行事業に関与すれば、おのずと対外、対人関係で新たな環境にはいり込まざるを得ない。世に出る好機である。

ところで、重太郎が参画した国立銀行といえは、国なり、政府なりが資本的に深いかわりを持つかに見える。明治初年、近代的銀行制度に取り組んだ伊藤博文が、アメリカの（ナショナル・バンク）を導入したことに端を発する。ナショナルを国立と訳した経緯は明らかではないが、国法に基づいて設立された銀行程度に考えておけば誤解を生じない。

この国立銀行は、明治五年の国立銀行条例によって五行（うち、第三国立は未開業のまま閉鎖）が発足、明治九年、改正国立銀行条例が公布され、総計一五三行にまで及んだ。旧条例は金貨兌換の義務を課せられていたため、たちまち行きづまり、改正条例によって不換紙幣一本に改められたが、地方産業興隆の誘い水の役目を果たすことになった。もっとも、明治十年代初頭では、近代産業家の自意識は低く、目新しい動きは認められない。

この第百三十国立銀行に、どういうことから松本重太郎がかかわり合うことになったのか。彼自身の事業経験から、モノを動かすにはまずカネが要る。そのカネが必要なときに、必要な額だけ効果的に調達できる——これが事業を円滑に経営できる基礎である。それも特定個人のためではなく、広く事業家に門戸を解放する。そうした主動的な意欲が、心中に起こりつつあったとき、金禄公債の資金化が関係者の間に問題になってきた。

金禄公債とは、明治二年の版籍奉還（土地と人民の朝廷への返上）に際し、旧藩士、公卿たちの秩禄（家禄、賞典禄）を廃止したことに端を発する一種の補償債権。当初は流動性のない「秩禄公債」であったが、その最終的な措置として金禄公債に切りかえられ、売買が自由になった。この公債証書の発行は明治十一年七月で、その年の六月と八月に東西それぞれ株式取引所が開かれている。符節を合わせた開設ぶりである。

ところで、この金禄公債の売買自由化は、第二維新ともいわれるが、簡単に処分できるようになったため、手に生業のない旧士族が生活費に追われて公債を手放すものが相次ぎ、流亡者が急増したという。

しかし、これを商業資金、あるいは生産資金に結実活用を考えたのが、当時群生しはじめた銀行業である。

多分に高利貸的な傾向を持っていたが、物資の流通や生産振興には必要不可欠な機関だから、都市といわず農村といわずブームに近い盛況ぶりであった。

丹後の宮津で十一年に生まれた第百三十国立銀行も、いわばその一つ。出資者は、もっぱら宮津や福知山方面の旧藩士で、商売に明るい者はいなかった。もっぱらあなた任せというわけだが、頭取は与謝郡岩滝町の縮緬機業家の小室佐喜藏であった。小室一族は、「山家屋」と称し、ほかに海運業や生糸、綿花などにも手を広げたいわば丹後の豪商だったらしい。

上記佐喜藏は、分家の一つだったが、その息子は明治初年の志士、信夫〔しのぶ〕で、のちに関東財界で活躍、この信夫は松本重太郎が社長となる大阪紡績〔明治十五年設立〕では役員陣に列したこともある。

この第百三十国立銀行設立に当たっては、どうやら重太郎がウラに回っているといろいろと画策したものである。それにしてもふしぎなほど小室佐喜藏の事業の記録が皆無に近い。同じ丹後の出身で、大阪で商売に成功した重太郎に全部を任せよう、といった気配すら察せられる。設立後間なしに、本店を大阪高麗橋三丁目に移し、その直後の株主総会で取締役兼支配人となり、さらに十三年七月に頭取に就任したことからみて、すべてが重太郎の手になったとみてよいだろう。

『伝記』の作者は、重太郎の銀行経営に対する態度を、簡潔に次のように記している。

資本金僅ニ金二十五万円ノ小銀行ナリシニモ拘ラズ、公共ノ利便ヲノミ之レ念トセシ翁ハ、当初ヨリ其貸付ノ基本ヲ对人本位トナシ、人物ノ賢実ニシテ、手腕ト伎倆ト共ニ優秀ナリト認メタル者ニハ、其担保品ノ有無ハ敢テ甚ダシク問フ所ナク巨額ノ財ヲ貸与シタルヲ以テ、之ガ為メ新ニ業ニ就クコトヲ得、将又祖業ヲ再興スルヲ得テ、身ヲ立テ産ヲ為シタルモノ甚ダ衆ク、引イテ頗ル関西実業界ノ発達ヲ助成スルヲ得タリ。

右の短評の中に、民間資本の蓄積が低いとき、融資するのにもっぱら对人信用に重きを置いて担保の有無を二のつぎとしたあたりは、実業家重太郎の側面を語って十分だろう。何びとかがその危険を負担しなければならぬのが実業界の現実と心得、その間にいろいろの人材を発見したり、重用したりしたのである。一面、過度の信用膨張の結果、みづから責任をとって引退する百三十銀行破綻にまで追いこむことになったわけでもあ



壮年時代の松方正義

るが……。

そうしたことはともかくとして、百三十国立銀行の頭取就任は地元では絶大な信用をかちとることになった。たちまち、以下の銀行が百三十国立銀行に吸収合併されることになった。第三百三十六国立銀行、大阪興業銀行、小西銀行、京都西陣銀行などで、その結果、資本金は一挙に二八五万円に増加した。さらに福知山銀行〔資本金一五万円〕と八十七銀行〔同二五万円〕が加わり、関西有数の大銀行となった。

このほかに、二、三行の設立に関与して、一時は関西金融界の大御所的存在となった。のち明治三十年代、大阪銀行集会所、あるいは大阪手形交換所のそれぞれ委員長に就任したのも当然のことであろう。

さらに、金融事業に関連して、見落とせないことがある。それは、新規設立の中央銀行〔即日本銀行〕に関与することであった。くわしくは後述するとおりであるが、重太郎みずからにとっては、まさに桧舞台への価値ある第一歩であった。

「日本銀行」設立の趣旨は、幣制の中央集権化と本位制の確立——近代国家としては当然の政策だが、その衝に当たったのが、松方正義であった。政治家としては、すこぶる地味な人物だが、明治十一年、在フランス時代、時の蔵相レオン・セーやその弟子のルロア・ポリューなどから国家財政について学問的な教えを受けていた。十四年、参議並大蔵卿となるや、早速幣制の改革に当たったわけで、日本銀行の創立がその皮切りといってもいい。

それではなぜ松本重太郎に「御用掛」を命じたのであろうか。当時、彼以上に有名であり、また能力のある人物はいくらもいたはず。これはどうやら、百三十銀行の設立やら、群小銀行の世話方をして着実に実績をあげていたことを、あるいは松方が知っていたのかもしれない。公式の松方の伝記には、それをほのめかすような記述はいっさいない。

両者の関係について、いささかこだわるようだが、後に「明治二十二年」松方正義はその四女光子を、重太郎の養嗣子泰『松蔵に嫁せしめたことに思い及ぶと、目に見えぬところで重太郎は理解者を持っていたといえよう。なお、松方正義は、フランス滞在時代、鉄道の産業に及ぼす役割についていろいろと関心を寄せていた、という。のちに重太郎が「関西の私鉄王」といわれる時期を迎えるが、両者の私的な談話の中で、鉄道事業につい



第三百十国立銀行券（三和銀行提供）  
「支配人」松本重太郎の名が見える。

て意見の交換もあっただろう。しかし、この二点についてもまったく資料らしいものは残されていない。

これは、後に再説するが、百三十銀行破綻の際、松方は政界の第一線から身を退いていた。いわば、ファミリーの中の一人の不始末で、実力者松方のテコ入れを予想する向きもあったようだが、是は是、非は非とする松方は、深い介入を行わなかった。合理主義者の面目躍如というところだ。

重太郎の事業家として大きく第一歩をふみ出したのは、なんといっても第三百十国立銀行設立への参画。皮肉にもその銀行の経営破綻で、財界から身を退かねばならなかったことは後述のとおりだ。

第三百十国立銀行の当初の資本金は、二五万円。いかに貨幣表示の低いときであったとはいえ二五万円の資本金は大きな額ではない。にもかかわらず、その銀行の取締役・支配人の松本重太郎はただ者ではない。それを証明するかのように十三年には頭取に昇進して、大阪財界の中堅にのし上ってきた。何度もくり返すようだが藩閥とも閥閥とも関係のない、裏日本の一寒村の農家出にすぎない。

その頭取に昇進してまもなく、今度は「日本銀行創立事務御用掛」を、大蔵省から申し付けられるのである。明治十五年九月のことだ。おそらくは、日銀大阪支店開設にあたって、諸事協力方よろしく頼む態の御用掛だったと推定される。これを推せんしたのが、どうやら外山脩造のようである。もと大蔵省の銀行課に勤務、明治十三年、「大阪第三十二国立銀行」の整理（総監役）終了後、初代の日銀大阪支店長（十五年）となるが重太郎を見込んでの推せんであったとみられる。

そのころ、松方正義は、大蔵大輔（次官）から大蔵卿（大臣）へと栄進する最中。造幣局の大貨幣試験などで、何度となく大阪財界と接触を重ねていたはず。その中に当然、松本重太郎がいた。五代や藤田傳三郎、あるいはいまいった外山脩造などの助言、推輓などがあつたと思われる。松方は、それとなく松本重太郎を観察していた。事を託して信頼に耐える人物に違いないと見たのだろう。日銀大阪支店設置の御用掛を仰せ付けたという次第。

その後の財界活動、事業活動をみていると、松方の目に狂いはなかった。明治二十五年、実子のなかった松本重太郎は、養嗣子に忝（松）蔵を迎える。忝蔵は大阪の古い両替商の末孫である井上保次郎の弟で、なかなか豪快な人物だったらしい。その忝蔵の妻として嫁してきたのが、松方正義の四女光子である。そして、光子の

嫁入りと前後して、松方正義が認知した第十子虎吉が養子として入籍する。一見、松方ファミリーの版図拡大のようにみえるが、政治的な方面からみると、まずゼロに近い。松方自身が維新以来、百余年の日本史の上で政治家としては第一ランクに列せられるが、政治家としては必ずしも高い評価を受けてはいない。政治以外の経済、文化面で、松方ファミリーが盛んな活動を展開していることは、一般に知られているとおりだ。

この日銀の御用掛は、なんともお上の仕事で、官尊民卑の強かった時代なので、重太郎の人気は一段と向上する。ついで起こってきたのが、大阪紡績の発足。大阪人は、府下西成郡三軒家村にあったので、三軒家紡績といって、大阪の新しい名所となった。それまで藩営、官営紡績は、いくらでも試みられたが、事業として成功した例がない。ところが、この大阪紡績は、純然たる民間資本、しかも当時としては英国から最新鋭の設備機械を輸入しての大規模経営。その初代社長（はじめ頭取といった）に就任したのは、藤田傳三郎だったが、明治二十年に松本重太郎がその後をつぎ、一〇年余にわたって社長の椅子にあった。

この大阪紡績は、創業時から好業績をあげ、文字どおり日本の産業革命の先陣を承る存在となった。関東から渋沢栄一「大阪紡績相談役」が加わり、さらに地元雄、藤田傳三郎が先頭に立ったわけだ。恵まれた環境からの出発とはいえ、重太郎は順風に乗っての船出であった。

明治十年代といえは、例の「松方デフレ」の言葉で圧縮表現されるように、通貨整理のために大ナタがふるわれ、国民生活も事業も一様に不況になやんだ。というのも、幣制改革、中央銀行設立といった一連の大事業が強行されたからである。松方構想は幸いにして所期の目的を達したわけだが、その渦の中に、一介の事業家・松本重太郎があったのである。そのうえ、本尊松方正義と縁続きとなる。松本重太郎は運命のふしぎさを深く感じいったと思わざるを得ない。

なぞらえて第百三十国立銀行を「ホップ」とすれば、大阪紡績は「ステップ」、そしていよいよジャンプ「阪堺鉄道」へ展開するということになる。

## 関西財界のトップへ

第三百十国立銀行の設立を見た明治十一年には、大阪株式取引所、大阪商法会議所が設立され、業務を開始している。いずれも、五代友厚の唱道によるものだ。彼は幕末、薩摩藩の命令で留学生を率いて、ヨーロッパへ赴き、商工業の実際を現地に見てきた。それは藩の商工業振興を目的とするものであった。しかし、維新後、一時期官途についた後、その素志を大阪の地で生かし展開することになった。

松本重太郎墓所  
墓碑銘に見るように、みずからの墓所をその壮年時すでに建立、第二次大戦時、アメリカ空軍の焼夷弾を被爆、辛うじて原型を保持している。（上本町九丁目 鳳林寺墓所）

私的には製藍事業、鉦山開発等に成果を上げたが、それ以上に関西の経済界に物心両面から活力を注入した功績は大きい。上記した取引所、商法会議所の開設も、五代積年の理想が具体化したものだ。商法会議所は、いうまでもなく現在の大阪商工会議所の源基になるが、実行者にふさわしくその初代の会頭に就任している。維新の大阪の経済界が混乱し、その衰退が著しく、その建て直しをみずからの手で行おうとしたものだ。「五代は先覚者として見識が高く、その人物のスケールの大きな点において明治初年〔関西だけではなく日本〕屈指の大実業家であった」（宮本又次『大阪人物誌』）。

さて、この「関西財界」編成の創始者である五代と松本重太郎とのかかわり具合はどうか。少なくとも、五代が草創期の関西財界で羽振りをきかせていたとき、周囲の注意を集中させるような関係にはなかった。さきあげた取引所、商法会議所の発起人の二つのグループの中に、重太郎の名は見えない。これから桜舞台へ出ていこうとする前で、藩閥はおろか、門閥、閥閥とも無縁であった重太郎が、五代の眼に止まらなかったのも当然だろう。

明治中期の社会探訪、工場視察で特異な記録を残した横山源之助は、五代の最盛時〔明治十年代〕の横顔をスケッチしている。

左様さ、彼の頃は種々な人物が五代の門に出入りしていた。薩摩人は大抵入り込んでいたが、日本銀行の吉原重俊や住友の広瀬宰平〔住友財閥の大番頭〕などは定連で、特に広瀬は五代に恩義があった故でもあるが、毎日のように来ていた。その外出入したのは阿部彦太郎（二八四〇～一九〇四）、田中市兵衛（一八三八～一九二〇）





大阪西成郡三軒家村、大阪紡織〔現東洋紡織〕本社工場事務所。明治二十年一月 松本重太郎頭取〔社長〕に就任

等であったが、出無精の藤田傳三郎（二八四一～一九二二）も、五代の肝煎で、小坂鉦山の下付を受けた因縁もあり、賈札事件後は、絶えず五代を尋ねていたようだった。或時松本重太郎も尋ねて来たが、当時松本は僅かに頭角を擡げたばかりの小商人じゃったから、五代の前に出ると、逡巡して、瞭然と対話も出来なかつたようじゃった。〔横山源之助『明治富豪史』〕

これをみて、当時の五代詣での実態がうかがえるが、松本の推挙にこれ努めたのは、おそらく藤田傳三郎ではなかつたか。藤田は、商法会議所発足に当たっては、副会頭の席に就くほどだったから、藤田の進言は重みのあるものであつたはずだ。

ところで、阪堺鉄道の設立についての請願は何回かあつた。五代はそれに対し、つねに大きな関心を寄せていた。最終的な設立計画には、発起人連署に名前こそ連ねなかつたが、藤田傳三郎が千金の重みを示すようにその末尾に名を記している。

なお、五代の政治家に対する態度を見ると、およその実力のほどがうかがえる。

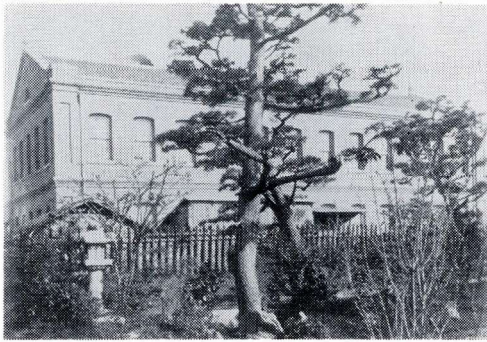
……大久保利通（二八三〇～一八七八）に対しては、彼の剛情我慢な五代も尊敬を払っていたようじゃった。

……何人が訪ねても、自身に出て迎えなかつた五代が、独り大久保来訪の時だけは、玄関に迎えたのを見ると、大久保一人に対しては、大いに許すところがあつたものと思われる。

……左様じゃ、五代が尊敬したのは大久保利通一人じゃった。その他は寺島宗則（一八三四～一八九三）でも、

黒田清隆（二八四〇～一九〇〇）でも、大隈重信（二八三八～一九三二）でも、松方正義（二八三五～一九二四）でも、別段敬意を払わなかつたようじゃ。松方などは遙かに下位に見て、小僧ツ子待遇にあしらっていたわい〔同右〕。

以上、横山源之助の記述から関西における五代の実力が抜群のものであつたことが推察できる。もっとも横山自身、五代の日常を実際に見聞したわけではない。というのも、彼の生年は、明治四年（二八七二）で十九年（二八八六）にはじめて故郷・富山県魚津町を後に上京して英吉利法律学校（のち東京法学院 現中央大学）に入学したのだから、年代的に、あるいは身分的に五代（二八三五～一八八五）に会えるはずがなかつた。にもかかわらず、読者の眼前に五代を活写し得たのは、上京後、二葉亭四迷（二八六四～一九〇九）、片山潜（二八五九～一九三三）らの文学者、社会運動家と交遊を重ねるうちに、社会探訪、人物研究に独自の分野を開拓、成果をあげることになった



大阪府西成郡下福島村にあった大阪盛業会社（明治二十五年ごろ）

のである。

彼は、二十七年に東京の『毎日新聞』（主宰者 島田三郎）に入るが、入社後数年にして成ったのが名著『日本の下層社会』であり、また農商務省編纂の『職工事情』（当時としては画期的な工場調査）にも執筆参加している。

ことばをかえていえば、そうした実証的な社会、経済調査を下地に、政・財界人の人物研究を重ねていったのである。上記した五代ほか一連の人物の交遊関係は、当時を知る人びとからの聞き取りに基づいたものと推定される。ただ、おもしろおかしく人物を並べたものではあるまい。

そうとしても、五代を訪問した松本重太郎の記述が些か注意をひく。横山の別の著書『凡人非凡人』（明治四十四年五月）では、「大阪企業界の阿修羅王」という形容を松本の頭にかぶせている。実力の程を評価しているかに見えるものの、残念なことには、重太郎を真つ正面にすえて人物評していないのは惜しまれる。

それは偶然であったか、どうかは分明ではないが、横山が『毎日新聞』のレポーターとして「大阪工場めぐり」を試みたとき、重太郎がみずから設立経営する一工場がその対象となっている。その記事は、明治三十八年八月十五日から十月二十七日の間に掲載された二工場・事業所の中の一つで、「大阪盛業株式会社」（のち「帝国ブラシ」と社名変更）がそれである。訪問工場の選択基準のようなものはなかったようで、ガラス、靴、団扇、メリヤス、時計、洋傘など種々雑多。大阪盛業も実は刷毛（歯 爪 頭髮ブラシ）の製造業で、横山は下福島村（現在の福島区堂島大橋右岸辺り）の工場を訪問している。わずか一六〇〇字ほどの短文ながら、刷毛業界では抜群の規模（従業員約五〇〇人）を有し、この業界の代表格であることを紹介する一方、特筆事項として、日曜日休業、皆勤賞与と優秀労働者に特別賞与を給付するなどの特徴をあげている。柄の原料の牛骨はアメリカ、豚毛はヨーロッパから輸入し、製品はすべてアメリカ向けで、外貨獲得産業であることを強調している。そしてこの事業の最高首脳は松本重太郎であるといったことを知っていたはず。具体的にこうした事情を見聞して、彼独自の「松本重太郎＝阿修羅王」像を作ったに違いない。

横山源之助が描く松本重太郎像は、明治十〜十五年ごろで、断片的情報を収集しながらも、それこそ一筆書きとして評価される。ひそかに、『明治富豪史』の大成を期していたかに見えるだけの説得力のある筆致だ。

文筆家横山の描く人物像に対し、実業人として、明治中期から大正、昭和の戦後まで生きぬいた池田成彬の



『故人今人』と池田成彬

松本重太郎観は、また格別の重味がある。

第二次大戦後、柳沢健、小汀利得、名取和作らが、話の引出役となって池田成彬の回顧談をまとめたものである。版元は「世界の日本社」、上巻は『財界回顧』、下巻は『故人今人』で、下巻はもっぱら人物中心の逸話集とでもいうべきもの。財界の最高峰をきわめ、時には内閣のカナメの椅子に坐った池田成彬の回顧録だけに、しばしば急所をついた事実が登場する。

以下やや長文ながら、明治三十年代に移ろうとするころの大阪財界の空気を伝え、かつまた松本重太郎がどんな環境にいたかを示すものである。

大阪に私の行ったのは明治二十九年の秋で、その当時の大阪は東京よりもっとひどかったものです。旧式でね。東京も銀行では洋服を着た者は少なかったが、大阪に行くと殆ど全部が手代式の人ばかり、学校出は殆どいないぐらいでしたね。それから店に行くと、こないだまで畳の上でやっておったのを、やると椅子を置いたという工合で、帳面はまさか大福帳ではなく洋式の帳簿を使って新しい簿記法でやっては居たが、あたりは悉く番頭さんみたいな人ばかりです。銀行がそうですから、外の商売だって無論そうです。殆んど新しい人はいなかった。

それから富の程度は東京も低かったが、大阪は殊に低かった。一〇万円以上の身代の人を拾って見ようじゃないかというので、銀行の調査係でやってみたところ、正確な数は覚えていないが多数はなかったものです。それで大抵富の程度が分ると思うが、当時三井銀行は紡績会社相手に直接の貸金と紡績株を担保とする貸金とが二〇〇万円か、三〇〇万円ぐらいあったかと思う。鐘紡事件の時にそれを回収されて非常に困ったものです。

大体その程度の規模であったが、そういう情勢で、一体誰が経済界を指導しておったかというところ、百三十銀行頭取の松本重太郎と、大阪商船会社の社長をしておった田中市兵衛——この二人のコンビで大阪の経済界はすっかり抑えられておったのですね。私はその情景を眼のあたりに見たのが、三十年の暮の事です。私は大阪に行ったばかりで、交渉は無かったが、銀行仲間の忘年会が開かれるので、各銀行から二人宛出るといので、私も行くことになったが、そこに集まったのは百人近くで銀行の正副支配人というところ

ころ、恐らくあの土地の本店銀行は二人宛でなくもつと行ったのでしようね。さて、会場の「堺<sup>まかい</sup>卯」へ行ってみると、なかなか始まらないから待っておる。そのうちに松本重太郎が入って来た。見ていると案内なしにさっさと正面の床の間に座る。その次に田中市兵衛が来たかと思うと、これ亦とつと行つて松本の次に座る。あとはその傍<sup>そば</sup>に行つて座る者がいないのです。そして、「皆さんどうぞお席に」と幹事から云われると、外の者は皆二人の所へ行つて頭を下げる、そして席につくその光景を見て、えらいものだと思ひました。松本重太郎というのは大阪の財界でただ一人光つておつただね。その松本の息子「養嗣子」が松「恣藏」で、松方「正義」の娘「四女光子」を貰つた。田中市兵衛は中橋徳五郎の舅だが、あれは別にどうということはない。兎に角二人は飛び抜けていて、あとこれに追いつく者はなかった。それだけに、第百三十銀行というものは非常な勢力を持つており、外に銀行はあつたらうけれども、我々は住友銀行「明治二十八年設立」というものは聞かなかつたし、鴻池銀行「同三十三年」というものも聞かなかつたもので、それ等はあつたらうが非常に小さなもので、百三十がひとり光つておりましたね。それにしてもその場に行つて私は、大阪の財界は本当に番頭さんみたいな者はかりの居る所だと思ひました。この会合で洋服を着て居つたのは私と、もう一人フロックコートを着たのと、この二人だけでしたからね。その時私は、松本と田中の前へ行つて名刺を出しました。松本は何を言つたか記憶にないが、田中市兵衛は悪口を云つたのか、ほめたのかかわらないようなことを口にしました。「あなたのような人がもう一人か二人も大阪へ来てくれると、大阪は余程変わりますがね。」というのです。たつた一人洋服を着て、アメリカから帰ってきたばかりですから応接の調子が何かと違つておつたのでしようね。初めて会つたのですし、三井銀行の行員だし、それには私に名刺に肩書きというものを書いたことではないのだから、ただ「池田成彬というもので、三井銀行の者です」といったのでしよう。

多少の思い違い、地方蔑視のきらいがないでもないが、スナップ写真のような鮮やかさで大阪財界のトップグループの生態をとらえている。ことに、重太郎がなにをいつたか記憶せぬままその動きだけを活写して、その実力のあるところを示していることは印象的である。松本が一時期五代の継承者といわれたことがあるが、まさにこれを証明する風景であつた。

松本重太郎が、事業経営の上で、あるいは家庭的な面で、精神的に一番充実感を覚えたのは、明治二十年代半ばごろであったと思われる。明治二十六年、父松岡亀右衛門八四歳の誕生日を、堺卯で盛大に祝っているが、そのとき、三冊のアルバムを作製、その一つを父に、残りの二部は泰蔵と勢次郎（重太郎側室の子、若くして死去に与えたとしている。現存しているのは、松岡家に伝わるものだが、豪華な写真帳で、重太郎が設立あるいは関係した会社約三〇社の工場、施設あるいは本社屋等を収録している。

この写真帳の巻頭を飾る父の八四歳を慶賀し、自分は現在、これだけの事業に関与していると記述する文章は、明治的な「立身出世」の報告文である。刻苦勉励による立身出世が善の善たるものであった。五十路を迎えて、松本重太郎は、せいっぱいおやじへの孝養をそのアルバム拝呈で表現したのである。

### 旺盛な事業意欲

次に、松本重太郎が直接間接関与した事業について概説してみよう。まず第一に気づくことは、明治初年の事業家といわれる人物は、たいてい早いか遅いかは別にして鉱山業に手を染めているが、重太郎は、一度もヤマに手を出していない。身近かな例を五代友厚あるいは藤田傳三郎にみてもすこぶる対照的である。

ついで、明治一ケタ時代を除いて、二ケタ時代以降、近代産業が根づきはじめて以来、重太郎はリヤ取り商売にまったくといっていいほど関心を示さず、製造業の育成に重心を置いてきた。事実、『大阪財界人物史』〔国勢協会 大正十四年十月〕によってみると、

近頃の事業家が会社を起こすといえは、すぐ権利株を当てこんで利益を吸うことに抜目はないが、松本氏には毫末も権利株などの觀念がなく事業そのものが目的であったから、創立に際して持った株式は、これを途中で売放つようなことはなく、あくまでも事業家たるの態度を失わなかった。と、一貫した経営態度を高く評価している。

彼が手がけた事業を大きく分類してみると、金融、紡績、交通（鉄道）、その他雑と四つに分けられる。金融を分類の先頭に置いたのは、事業家として公的な活動をはじめたのが百三十三国立銀行の支配人であって、それ

を起点にして、その後の事業家の成長がみられたからである。

銀行家としての力量が認められたことから、やがて紡績業「大阪紡績」設立について出資者だけではなしに経営者としても万人の賛同を得、その他事業に対してもコンサルタント的な面からも新たな評価を得るにいたった。いいかえれば、資本家＝経営者として自立する機をつかんだわけだが、維新直後の藩閥主義的な傾向は、大阪固有の風土の中では、一段と風化を速めていった。それだけに藩閥、門閥とは無縁の重太郎は、それらに対し、等距離外交で行動し得る立場にあった。いいかえるとみずからの行動の主体性を発揮し得る環境に恵まれていたといえそうだ。

さらにこれを補完するものとして、抜群の行動力に富んでいたこと、すなわち他人の意見を聞く耳をもって、いたこと、速やかな判断と決断力をもっていったことが、事業経営の曲折の間にかがえる。そして重太郎に欠けていたことは、奇妙なほど一貫して事業の後継者が育たなかったことである。育てようとした意欲があったのかどうか。彼が関与した企業一つひとつをとってみても、これを証明するようなものが見当たらない。晩年にいたって、むしろ育てなかったのをよしとするような気配も見られる。

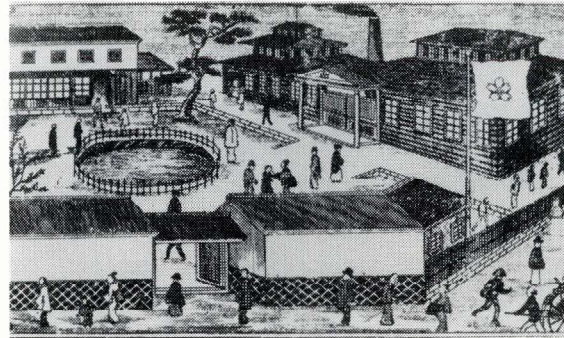
以下は、部門別にみた事業の一覧表だが、数字は年月日で、できる限り重太郎の経験した役職を付記した。数字の最上位は、各事業会社の設立年月。

総数三〇数社に及んでいるが、なお遺失しているものがあると思われる。

#### 金融部門

第三百三十銀行	明11・9	支配人	明13	頭取	
明治生命	明14・7	取締役			
大阪共立銀行	明20・11	取締役	明33・1	監査役	
日本火災保険	明25・4	監査役	明29・4	取締役〔当初、大阪に本社、のち東京へ〕	
日本海陸火災保険	明26・12	監査役〔社長	片岡直温〕		
大阪興業銀行	明26	明27・3	頭取	明31・9	第三百三十銀行に合併
日本貯金銀行	明28・2	取締役	明37	退任	

淀谷紡績所



またの名を堂島紡績と称し明治二十九年創立の日本紡績〔松本重太郎社長〕に合併された。

明治銀行 明29・8 取締役 明30・1 頭取 引退後相談役、浪速銀行に合併  
 浪速銀行 明29・10 社長  
 浪速銀行 明31・1 開業〔前身明11・1創立第三十二国立銀行〕、のち、第五、明治、共立、商工の各行を合併

紡績部門

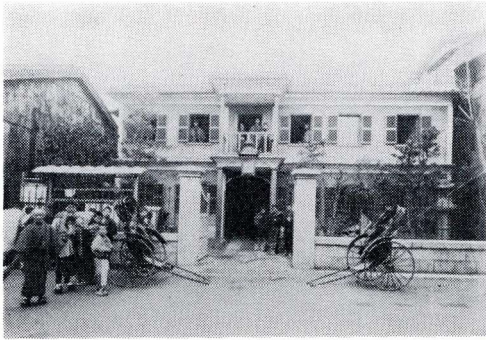
大阪紡績 明15・5 取締役 明20・1 社長 明31・7 相談役  
 大阪織布 明20・5 頭取 大阪紡績に合併  
 京都製糸 明21 監査役 明26・12 取締役  
 大阪毛織 明27・5 社長  
 毛斯綸紡績 明29・1 明29・3 終生社長  
 日本紡績 明29・1 社長〔のち泰蔵社長〕

鉄道〔交通〕部門

阪界鉄道 明17・6 社長  
 讃岐鉄道 明21・2 明35・10 社長 明37・9 辞任  
 山陽鉄道 明21・4 発起人 明25・4 社長 明37・4 辞任  
 豊州鉄道 明23・11 監査役、取締役、社長 明34・4 九州鉄道に合併  
 浪速鉄道 明26・10 監査役 明30・2 関西鉄道に合併  
 阪鶴鉄道 明27・7 監査役 明37・10 辞任  
 南海鉄道 明28・8 社長 明37・6 辞任  
 七尾鉄道 明29・1 明32・4 社長 明37・7 辞任  
 太湖汽船 明17・7 取締役 明23・1 相談役 明27・1 監査役  
 豊川鉄道 明29・1 明35・7 社長 明37・6 辞任

その他事業

大阪アルカリ 〔明13・4 前身は硫酸製造〕 明20 取締役 明31 相談役  
 大阪麦酒 明20 監査役、相談役



大阪毎日新聞本社〔大川町時代〕  
明治二十二年九月、松本重太郎監査役  
就任

大阪毎日新聞	明21・11	明23・8 監査役〔前身は明14『大阪日報』終生相談役〕
日本盛業	明22・10	または帝国ブラシ 社長
堺酒造	明26・11	監査役〔専務・宅徳平〕
大阪興業	明27・2	未詳
日本精糖	明28・12	社長 明29 日本精製糖に合併
汽車製造合名	明29・9	業務担当社員〔同渋谷栄一、同専任に井上勝〕
大阪瓦斯	明29・10	明35・2 監査役 37・6 辞任
明治炭坑	明29	監査役〔のち安川敬一郎に依頼〕
大阪運河	明30・8	設立当初社長

松本重太郎が、関係した事業でも毛色が変わっているのが『大阪毎日新聞』である。大阪毎日の発祥は、明治九年二月創刊の『大阪日報』で、論説入りのいわゆる大新聞であった。売れ行きはよかったのだが、社主と社長の間がうまくいかず、十五年に廃刊、『日本立憲政新聞』として転生した。さらに十八年九月に『大阪日報』と改題するが、二十一年六月経営の行きづまりとなり、同年十一月二十日『毎日新聞』として新生した。商社「兼松」〔現兼松江商〕の兼松房次郎が経営の中心となり、それまでの政論新聞の行き方を大修正し、実業家の新聞〔組合組織〕とした。

その後、二十三年に株式会社組織変えたとき、社長に渡辺治、そして松本重太郎、本山彦一、田中市兵衛の三人が監査役となった。本山はのちに、二代目社長・原敬の政界入りのもと社長になるが、松本重太郎とは終生親交を重ねた。また田中市兵衛も、大阪の商家出身で、重太郎との往来も長く、阪堺鉄道の役員として参加する。

毎日新聞については、近親者に対して次のような思い出を述べていたことを追記しておこう。

「監査役に就任したとき祖父は、『社員手帳・第一号』の刻印の入った小冊子の配布を受けて、ずっとこれを身辺に置いていた。よほどうれしかったのでしょう。わたしが夏休みなどに高野山の常喜院を訪れたとき、たびたび手帳を見せながらよく話してくれたものです。毎日新聞の監査役は早くから退きましたが、終生相談役を引き受けていました。」〔国際文化会館館長 松本重治談話〕

## 日本の私鉄王の栄冠

別表にみるように、明治十年代末から二十年代にかけて、松本重太郎が直接、間接関与した鉄道は九社で、これに鉄道連絡船一社が加わる。

その当時、国有鉄道は意気込みだけは高かったが、営業キロでは全国に拡散する私鉄をまとめた方がはるかに長大であった。その私鉄の中の九社に関与した重太郎が、「私鉄王」のニックネームをいただくに及んだのは当然であろう。

のち、昭和時代、当社の取締役会長となる根津嘉一郎も「私鉄王」の名を奉られるが、重太郎の行き方とは少し趣きを異にしている。根津は、市場にある株式を通じて事業を支配しようとしたのに対し、重太郎の場合は、株式の売買による会社支配は関心の外で、事業内容充実を第一とする印象が強い。

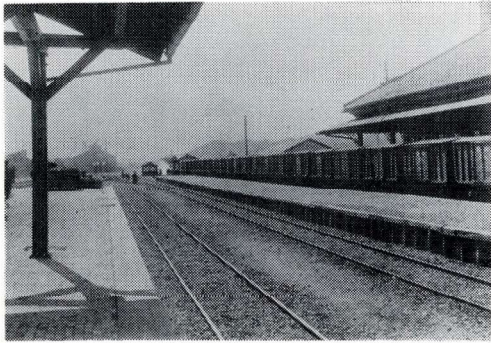
そういう色合いの相違はあるが、重太郎を「私鉄王一世」と称しても、決していい過ぎではない。彼が阪界鉄道で成功した事業家としての自信を深め、第二、第三と食指を伸ばしていくのは当然であろう。「南海鉄道」〔明治二十八年創立〕の前身である紀泉鉄道然り、山陽鉄道然りである。

紀泉鉄道については別項で述べるので再説を省くが、山陽鉄道について簡単にふれておこう。

山陽鉄道のそもその発端は、神戸と姫路間に鉄道敷設の話が持ちあがった明治十九年ごろのことである。官設の京・阪・神をつなぐ鉄道の利便については、もう異論の出ようもなくなっていた。あとは東海道線の全通〔二十二年七月一日〕をそれこそ指折り数えて待つばかりであった。誰しも考えるのは、山陽道に鉄道を建設するということであろう。

「山陽鉄道」の発起人の名前を見ると、石田貫之助、小西新右衛門ら地元兵庫の出身者がいるが、鉄道についてはもちろんのこと会社経営などまったくの素人だったらしい。そこで、大阪の藤田傳三郎、横浜の原六郎〔正金銀行頭取〕、三菱の庄田平五郎らの出馬を願って建設を進めよう、という算段になった。

計画が具体化すると、政府の方から、都合のよい短区間だけつまみ食いするような建設はまかりならぬとい



明治二十五年ごろの山陽鉄道  
同年四月に松本重太郎社長に就任、兵庫駅(?)に停車中の貨車。トピラに社章がつけられている。

う達しがきた。日本鉄道の父といわれた井上勝鉄道局長の意向であった。彼は幹線はすべて国営によるべきだ  
という信念の持ち主。多分に国防国家的な理念が心底にあったものと推定される。

そこでやむなく、山陽鉄道は、馬関(下関)まで建設することではなしはまとまった。いささか、ひょうたん  
から駒が出たような話だが、この私鉄がのちの国鉄山陽本線の基になる。それから、十九年当時は、まだ「私  
設鉄道条例」(二十年五月十八日公布)の公布前であった。したがって、山陽鉄道はその第一号に当たるわけ。

さて、創立委員総代に登場してきたのが中上川彦次郎。三菱の荘田平五郎の推薦によるものであった。福沢  
諭吉の甥であり、外遊三年の新知識である。みづから社長になると同時に村野山人を副社長として建設にとり  
かかった。

その建設に当たって、合理主義者・中上川の面目を伝える数かずの逸話を残しているが、三年の在任で退社  
することになった。退任の理由として地元関西出身者との経営感覚の相違とかいろいろいわれている。

しかし、明治二十五年七月、神戸(三原間一四〇マイル)は開通したものの、二十三年来の不況がなかなか回  
復せず、工事継続が一頓座する気配となったのである。事実、建設工事を持ちこたえた各私鉄の多くは工費  
調達にゆき悩んでいた。はては、政府による私鉄買上げ法案を、帝国議会に持ちこむような動きもあった。中  
上川もほとほとイヤがさしたものと思われる。

代わって、そのあとに社長となるのが、松本重太郎である。かねて、発起人の名簿の中に名を連ねていただ  
けでなく、旧知の藤田傳三郎の慫慂もあってのことである。

重太郎としては、すでに阪界鉄道建設に当たってひとかたならぬ苦勞を味わっている。それも無から有を生  
じるような創業者の辛酸をなめている。今度は、本州を縦貫する大幹線で、挑戦の対象に不足はない。しかも  
幹線は日本の国運を左右する重要なものである。こうした認識を前提にして活動をはじめた。さっそく、政府  
に向かっては特別補助金の下付を求める一方、工費の一部に資するため、不安動揺の株主に対し、説得にこれ  
つとめた。しかし、そのいずれも奏功せず、いろいろと画策につとめていたが、窮すれば通ずというのだろ  
う。景気陽転の気運を得、ようやくにして、二十六年四月、社債二〇〇万円を募集する機会を迎えた。これを  
僥倖というのは当たらない。すべての退勢に対して、あらゆる防戦を試みているうちに一すじの光りを手中に

つかんだというべきであろう。

起債二〇〇万円によって得た資金は、三原から山中に入り、広島市へ向かう山陽線の継続工事に注入された。そして工事ようやく成らんとしたとき、「日清戦争」のぼつ発(二十七年八月一日宣戦布告)を見たのである。実際には、開業免許をみない二十七年六月七日から軍隊兵員はもちろん、軍需品の輸送をはじめていたらしい。かりに中上川のあとを引き受ける人物がなかったとしたらばどうであったか。日清戦争の展開もかなりちがった様相展開を呈したことは確実。

旭日の勢いで興隆する日本の進運に、大きく寄与したことに十分以上の満足感を覚えたはずである。まさに『伝記』のいうとおり、「ヨク当局ノ負荷ニ堪へ、空軍前ノ盛事ニ奉仕スルヲ得タルガ如キ、其功当ニ我國運輸史上特筆大書スルニ余アルモノト云フヲ得ベシ」である。

別項に重太郎臨終に際して「宮内省御沙汰書」で位三級特進のあったことは後述のとおりだが、もっぱらこのときの功績を参酌した上でのことであった。

このあと山陽鉄道は、明治三十一年三月、広島〜三田尻(現防府)、同三十四年、三田尻〜下関に至り、山陽全線の開通を見ることになった。

この山陽線は後に、政府買上げになるが、この大建設の完遂で、松本重太郎は文字どおり日本の私鉄王になったのである。

山陽鉄道の国有化(三十九年十二月)で、松本重太郎の事蹟は風化するに任されてきたことは惜まれる。

さらに、山陽鉄道に関連して忘れてならないのは、大塚惟明の存在であろう。南海鉄道第四代、六代の社長であることは周知のところだが、実は山陽鉄道に明治二十四年入社(最下級職)、三十年運輸課貨物掛長に進んだが、三十一年三月讃岐鉄道に転じ支配人、専務取締役となる。

讃岐鉄道時代、高松駅の海陸連絡設備の拡充、高松ホテル、高松水族館、琴平水族館、列車内喫茶室の開設、女子列車給仕の採用など新風を吹きこんだことが高く評価されている。

この大塚の存在を、松本重太郎は、ひそかに観察していたに違いない。三十八年三月、南海入りしたとき、重太郎はすでに退任していたが、なんらかの推薦のことがあったものと思われる。

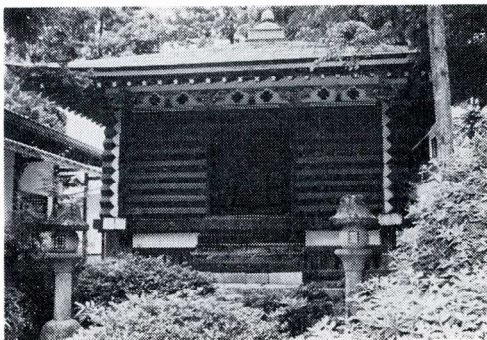
## 心境の変化

少年時代から健康に自信のあった重太郎だが「明治三十年ノ頃突然脳病ヲ患」って、いっさいの世事を投げ捨てて、高野山常喜院にこもる事態が生じた。右は『雙軒松本重太郎翁伝』の記すところだが、脳病といってもどんな工合に悪かったのか、具体的な記述はない。亡き両親の菩提を弔うべく境内に「持仏堂」を建立するなどして日を送ったとある。そうしたある日のこと、側近に次のような心意をもらした。

世の中には、学問はあるけれど経験がなく、逆に経験はあるけれど学問のない者がたいへん多い。自分のような者も、この後の部類にはいる。ふり返ってみれば、自分が思ってもみなかったほど世間さまからちやほやされてきた。数多くの会社の重役になったものの、よくよく考えてみると、どうにも不つり合いな場合が多いように思う。そうはいっても、自分が企画した事業については、ひたすら誠心誠意をつくり、社会公共のために働いてきたと思う。そんな事情なので心中なんのやましい気持ちもない。ただ実例をあげていうと、みずからの本業を銀行家としながら、事業会社の経営に直接たずさわるようなことはいかなるものだろうか。ある日、一大事変が起こったとせんか、それをキッカケにその事業会社の内部にかかえている弱点が一挙に表へ出てくることもあるはず。測り知れない大きな衝撃を社会全体に与えることもあり得る。銀行家はたくさんの事業に関与して金融業務を営んでいるから影響するところは大きい。というわけで、事業家であり銀行家である自分は、この辺りで身辺整理する時ではないか。

これに多少の注釈を加えると、たしかに松本個人の体験から出た改善意見だが、一般的にみて同じように同一人で銀行家と事業家を兼ねている人が少なくない。一朝有事の際のことを思うと他人事ではない。率先範を天下に示そうという気概がそこにあっただけである。

何事によらず、決めればたちまち実行に移す重太郎、下山するやすぐさま関係諸会社に対し辞職の決意を明らかにした。しかしながら陣頭指揮を常としてきた翼下の会社は、松本重太郎の突然の辞意表明に大きな動揺をもたらした。動揺を招くのは本意でないとしながら、沈静する機会をまって、翌三十一年に大阪紡績、明治



高野山常喜院境内、松本家持仏堂

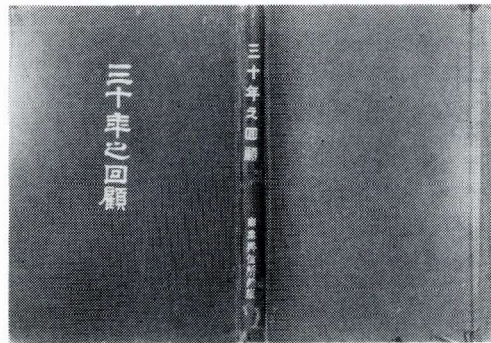
銀行「名古屋」、日本紡績、大阪アルカリなどの社長、頭取の職から身を退く一方、その他関係会社の役員も辞任し、できる限りの軽量化を図ることにした。

そうした身辺整理のキッカケを作った「脳病」は、どうやら手一ぱい抱えた仕事からの解放のために設けた口実の印象が濃い。事業をはじめた当初はともかくとして、銀行、会社のうちの何割かは、他より奨められて役員を引受けたものと見られる。当該事業としては、財界のトップを行く人物の存在だけで、対外信用の度合が違ふ。複数の銀行の役員を兼務している松本自身も、自分が役員になっておれば、系列事業に対して金融面で特別な配慮をしなければならぬことも生じてくる。詮じつめたところ、松本重太郎の面倒見の良さ、あるいはふところの大きさが逆に負い目になってきた。それと同時に、身内あるいは腹心の部下——ひと口でいえば翼下の事業に対しファミリー支配を実行するような行き方も採っていない。伸びきった戦線をなんとか収縮させねばならない。そうした悩みが「脳病」となって発現したのではないだろうか。

年齢はすでに五十路を過ぎること三歳。人生五〇年といわれた時代のこと。営々として働きつづけて四〇年、気づかれを生じたのも当然のことであろう。

彼が心境変化を起こした三十年ごろは、日清戦争後の賠償金人気の退潮後の反動期で、金利高騰、銀行取付騒ぎ、輸出減退、輸入激増、株価暴騰等不況の色合いが濃かった。ことに「紡績会社は金融・販路両方面の閉塞に遭遇し遂に紡績恐慌ともいふべき有様を顕出し」と商業興信所『三十年之回顧』(大正十一年)は述べている。数行の銀行の経営の衝に当たる一方、他方ではまた数社の紡績、織布会社の首脳部の席については、「紡績恐慌」の襲来を前にして神経の安まるはずはない。くり返すようだが、ファミリー的経営に余り関心のなかつた重太郎には、いささか荷が重すぎたようでもある。

幸いにして、明治三十年前後の不況期に傘下事業で破綻するものはなく、続く三十一年の紡績不況、三十四年の恐慌に際しても松本重太郎関係の事業会社はまずまずの耐久力を示した。むしろ、銀行家として、危ない企業をいかに救済するかを課題としていた。



信用調査機関の草分け「商業興信所」の回顧録

## 外遊、カーネギー訪問

高野山へ籠ること、いくばくもなくして山を下りることになった。もともと頑健な身体の持主だっただけに、ひとときも同じ所に起き伏しすることはニガ手。周囲の人びとも大いに配慮するところがあつたらしい。生まれてはじめての洋行にふみきることになった。

そのころの表現「欧州漫遊」に参加した紳士は、総勢一〇名。筆頭者はいうまでもなく松本重太郎。前任友家の理事の田辺貞吉、ついで養嗣子泰蔵の実兄・井上保次郎の名前がみえる。重太郎の秘書として加わったのが速水太郎であつた。重太郎が社長をしていた阪鶴鉄道の秘書役で、晩年は山陽中央水電の社長となつた人物。『速水太郎伝』の中に、「欧米事業視察」の一章を設けて、一行の旅程、印象記等を記述している。

視察は、明治三十三年五月二十一日の神戸港出帆、ヨーロッパ諸国の首都、工業地十数か所に及んだ。ロンドン滞在中には、スコットランド北辺、ドルノック近在にあるアンドルー・カーネギーの別荘を訪問する好機があつた。三井物産ロンドン支店長山本条太郎の肝煎による面会であつた。いまでこそカーネギーといつても、もう一つ強烈な印象を与えないが、そのころ「億万長者」といわれたアメリカの大富豪である。日本で少々の成功者といつてもカーネギーからみれば問題にもならない。と重太郎は思っていたに違いない。しかし会ってみればまったく予想外のことだつた。その印象を、次のように述べている。(伝記)

「カ」氏ハ談話快活ニシテ、而モ客ヲ遇スル慰勸丁寧ヲ極ム。予等一行ノ氏ヲ訪フヤ、親シク支関ニ送り出デシハ勿論、自ラ余等ノ馬車ノ扉ヲ開閉シテ、其ノ乗降ヲ扶ケツツ挨拶セラルルニ至ル。如此敦厚朴野ナル一介ノ童顔白髪翁ヲ、誰レカ富數十億ヲ累ネタル世界ノ大富豪ナリト信ズルモノアラシヤ、之ヲ我  
国ノ富豪ノ徒ラニ自大セル、傲岸ナル接客ノ態度ト比較スルニ、誠ニ雲泥ノ差アリ、余ハ先ヅ最モ比点ニ  
感服シタルト共ニ「カ」氏ニ学ブ所頗ル多キモノアルヲ感ゼザルヲ得ザリキ〔以下略〕。

以上は、速水太郎の随行時のメモの中に残っていたものから採用したものとみられる。彼と我、富豪の態度を比較して、なんと大きな開きのあることかと、秘書の速水にもらしたのであろう。彼自身、カーネギーの人



松本重太郎銅像建設除幕式記念写真〔大正十年六月十八日〕

場所は現 南海ビル北東角付近  
前列中央が善嗣子奈蔵夫妻、同左から  
二人目孫重治、後列左から四人目は銅像  
建設委員長永田仁助

を遇する様子に共鳴したというより、すでに彼の採ってきた態度に一段の自信をもったように思われる。彼はいかに客を遇したか、彼の翼下になった従業員をいかに取り扱ったか、具体的に例をあげることができない。しかし彼が着実に事業を成功させ、あるいは事業を起こすに当たって達識の人物を呼び集めることができたのは、「人を遇する道」を知っていたからだ。

折りにふれても、しばしばカーネギー会見の印象を語っているが、漫遊記中最大のできごとであったに違いない。

ヨーロッパを後に、アメリカへ渡るが、ポストン、フィラデルフィア、ワシントン、ピッツバーグ等を経て、サンフランシスコ出帆、横浜に帰着したのは十一月四日のことであった。五か月余りの世界一周は、精神的には大きな収穫を得たようだが、事業の経営については、いま一つ積極的に取り組む意欲がわいてこない。先にもふれた第一線からの引退の決意を改める気持ちにならなかった。

見方を変えると、とにかくにも馬車馬のように、走りぬいてきた。このあたりで少しは一服といった気分を求めるような気持ちになったのではないだろうか。漫遊から帰国した十一月の末、彼と親交のあった有志一同が寄って、一夕海外視察談を聞こうではないかということになった。見聞記はなかなか刺激的なものであったようだ。席上、こうした有意義な集まりを恒久的に開くことを取り決め、会員の首長を松本重太郎に引き受けてもらうことになった。

「本会は会員の経験と学能とを融和し、併せて会員相互の交誼を篤ふするを以て目的」とし、「本会はイー・エス会と称す」とした。英語のエキスペリエンスとサイエンスの頭文字をとったのがミソ。

上記した『速水太郎伝』によると、「この会は松本重太郎氏を中心に華城業界〔大阪財界〕の各種一流の代表人物を網羅して数より質を厳選し、爾来今日に至る〔昭和十四年現在〕約四〇余年間連綿として存続されている」。いかえると、松本重太郎没後も、この「イー・エス会」は続いていたが、この会の幹事であった医博緒方正清〔死去によって医博佐多愛彦〕、速水太郎、柿崎欽吾によって、松本重太郎の銅像建立のはなしが表面にでた。そして最終的には関東の渋沢栄一、荏田平五郎、中橋徳五郎までを動かして、目的を果たすことができた。

この銅像は、昭和五、六年当時、旧難波駅頭の広場に立って、南海鉄道の乗降客には、なじみ深い存在であっ

た。惜しいことに、第二次世界大戦時に金属回収献納運動の犠牲になってしまった。

## 百三十銀行の破綻

明治三十七年二月、日本政府はロシアに対し国交断絶の通牒を発したが、その一報を入れるとたちまち株式市場は総崩れとなった。それからいくばくもなくなって、旅順港、仁川港の敵艦の襲撃に戦果が上がると、株価は大反騰。にわかには戦争景気を謳歌する世相となった。

そんなさ中に、「兵庫県西宮町の日本紡績株式会社は従来営業の方法宜しきを失い、欠損を重ねながら多額の手形を発出し、わずかに糊塗し来たりしも銀行の警戒する所となり、ついに支え得ずして六月中旬支払を停止し、十二月に入り解散を決議」〔商業興信所『三十年之回顧』〕せざるを得なくなった。

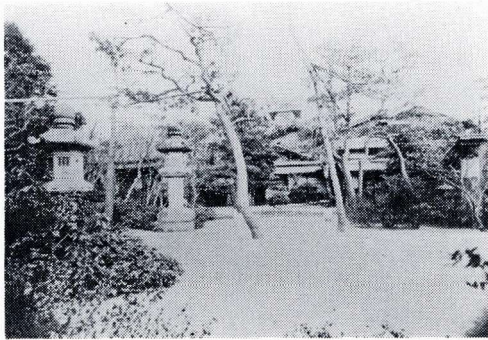
百三十銀行が取り付けに会う導火線の役目を果たしたが、この日本紡績であった。その設立は、一応明治二十九年になっているが、実は明治十七年に、時の大阪府知事建野郷三から懇望されて引き受けた旧「堂島紡績所」が元の設備。かつて小僧時代を過した天満の「綿利」と往來のあった渋谷しぶたに一族が経営していた事業所である。重太郎にとっては、青年時代の回想に連なる事業であった。

大正元年十一月十五日の『実業之日本』所載の「関西実業界当年の雄傑松本重太郎氏今如何」によっても「同社は殆んど君が一家の事業とも称すべき程全力を傾注せるもので、養子忝蔵君を社長とし君は取締役となり、経営の任に当たったが、創立以来事業の進捗面白からず、毎期無配当に次ぐ無配当を以てし、幾度か資金を注入して欠損を補填する必要に迫られたので、君の苦痛は一方ならなかった。而して同社は遂に経営難の度に寂滅するに至ったが、本事業こそ少くとも君の蹉跌せる重要な原因の一つであったという」。

百三十銀行の破綻の様相を冷静に記録しているのは、やはり右にみた『三十年之回顧』の中の一文である。やや長文になるが、正確を第一とするので、以下に採録する。

百三十銀行救済事件　本件は本年の財界諸問題中最も世間の注目を惹きしものなりき。同行は大阪店の外支店十四を有し、大阪実業界の長老松本重太郎氏頭取として多年主宰し来りしも、同氏は関係事業広

況にして充分力を銀行経営に注ぐ能わず、かつ同銀行には充分同氏を補佐し得べき適當の人物なかりしをもつて自然銀行の貸出の慎重を欠き、本店及び京都、福井、九州等の各支店において、多額の固定貸もしくは滞貨を生じたり、しかるに毎年度の決算に於てこれを整理することをなさずして、利益はことごとくこれを配当に振り向けたりしかば、銀行の実質は益々不良となり、殊に日本紡織会社（むす）に多額の貸金をなし、百万円ばかりの損失を蒙るべき破目に陥りし折りから、同会社は支払を停止せしかば、当行は忽ち世間の注目点となり漸次預金の取付けを受くるに至りしかば、急を日本銀行に告げて救済を求めしに、日本銀行は百三十銀行が破綻を来たすにおいては、内外募債に大影響を与うべきを顧慮し、大蔵大臣に稟議の上政府保証の下に百万円を貸与せり。これにて一時を支えしも、同行に対する風評は日を追うて伝播し京都、舞鶴、長浜等の各支店激しく預金の取付けを受け、ついに持ちきれずして同行は五月十七日臨時休業を發表せり。これがため、大いに世間を驚かしたりき。これと同時に日本貯金銀行は、松本重太郎氏が重役の一員たる関係より、預金者の疑惑を招き預金の取付け猛然として起こり、十七日中に五十万円を支払えり。また、無関係なる大阪貯蓄銀行南支店も余波を受け、若干の預金を取付けられたり。その他揚井銀行、五十八銀行も若干の預金引出しを受けたれども、これらは格別のことなくして鎮静せり。而して百三十銀行の休業を、このまま捨ておくときは、その迷惑を蒙る区域は広汎にしてついにこれがため一般に恐慌を起こし、今後国庫債権の募集に大影響を与うるやも凶られず、また外国においても、本邦経済界に動揺ありと聞かば、疑惧の念を起こし、外債募集に應ぜざるやも凶り難し、軍国の大事を眼前に控えおるをもつて、黙視する能わずとして、政府は七月八日、閣議を開いて同行救済を決定、さらに上奏裁可を得て金額百万円を臨時応急の支出となし、これを百三十銀行に貸与し、財界の有力者たる安田善次郎氏に整理復活を托せり。その貸付条件は利子を年二朱とし、明治四十二年十月十四日まで据え置き四十三年より五ヶ年賦にて毎年百二十万円づつ返納すること、日本銀行より当行に対し監督人を付すること等にあり。しかるに当時同行の内容は、松本重太郎氏に対する無担保貸金約百二十万円の返却が完全に行われるものとしても、なお欠損のおそれある貸出金実に四百五十万円あり。株主勘定に属するもの三百七十余万円を差引きするも、なお純損約七、八十万円を生ずべく、語をかえていえば、いま銀行をつぶせば七、八十万円の



堂島浜通りの松本邸〔はじめは別荘と称した〕

不足をみるということになる。実にこの整理回復は、至難中の至難にして、尋常一般の士にては、とうていなし能わざる所なり。幸いに安田氏がこの委託を応諾し、七月十一日をもって再び開店せしが、預金者中安田氏の引き受けを聞き、安堵せしもの少からざれども、なお預金の払い戻しを請求するもの少からず、結局払戻額四百二十六万円をもって常態に復し、準備金に余裕を生じ、これより漸次業務の回復を図ることとなりたり。

### 隠棲の地を求めて

百三十銀行の経営破綻がそれである。重太郎にとっては来るべきものが来たという感懷をもって迎えた気配すら見える。すでに三十年当時、事業経営全般についての彼なりの疑義と不安を感じ側近に心中を吐露したことはさきに述べたとおりで、今や危機感が現実になったと判断した。

もう一度、商業興信所『三十年之回顧』中の一節を引用しよう。

松本商店債務処分　松本重太郎氏の店主たる松本商店は百三十銀行の閉店と同時に営業維持不可能となり、七月十五日堺卯楼に債権者を招集して松本氏は自家経営の不始末を陳謝し、田中市兵衛、藤江章夫二氏へ委任の挨拶をなして退席したるが、その時の報告に債務二百五十七万五千五百余円、資産二百万二千四百余円、対比五十七万三千余円の不足なりといえり。然るに出席者中より委員五名を挙げ、その後詳細に調査せしに担保品を処分するときは、残存債務百二十八万七千余円となり、資産六十四万八千五百余円を償還に充つるときは五割四分に相当することを確認したりしかば、債権者一同は松本氏の境遇に同情しこの配当を以て帳消しとすることに決定したりという。

やがて松本重太郎には、堂島の本邸を去らねばならぬ日がやってきた。堂島の邸というのは、現在東洋紡本社屋のあるところである。敷地は一〇〇〇平方メートルに過ぎなかったが、邸内の庭園は、当時の市内では有数の名園であつたらしい。かねてから造園について専門家に伍して劣らぬほどの研究を重ねてきた重太郎自身の作品であつた。



梅屋敷風景  
〔大阪繁昌誌〕明治三十一年

その芸が身を助けたというわけだろうか。この立ち去り難い堂島を後に身を寄せたのが、上本町は東高津の「梅屋敷」であった。現在の地図に重ねると、ちょうど上本町六丁目の近鉄ターミナルから大阪赤十字病院のある辺りだ。字義通り丘陵上に梅林が連なっていた。ここより北へ、新梅屋敷があって、梅見時には市内からの遊山客の足が絶えなかったという。

この梅林の中に、山口吉郎兵衛の屋敷があつて、その造園に当たっては、重太郎が精魂を傾けて構想をねり、作業場へ直々に足を運んだと伝えられている。格別、造園学とかいったものに浮身をやつしたわけでもなく、ただ好きのあげくのことであつた。高野山に開いた常喜院の現存の庭も、その作品の一つだが、結構とか布置などについては専門家の採点にも十分に合格するものであるという。

この梅屋敷も、大阪電気軌道〔現近畿日本鉄道〕奈良線の開通とターミナル建設で、逐次姿を消していき、今では想像も及ばない変容ぶりである。

しかし、いつまでも居候を決めこむのは本意にあらずとしていたが、古くからのお出入りの棟梁木村音右衛門が、今度は世話方となつて空堀に小じんまりした邸をたてることになった。

さきにも紹介した『実業之日本』誌の記事によれば、「大阪陣の昔を偲ぶ真田山を眺め、一世の英雄豊太閤の栄華の夢を語り顔なる大阪城の片ほとり、東区空堀町三丁目二百三十三番という建坪三十坪ばかりの粗末なる一軒の家がある。」粗末なる一軒の家とは、手きびしい表現だが、棟梁の木村が積年の恩顧に報ゆるべく一建立でプレゼントしてくれたもの。せまい敷地といいながら、「空堀ノ別邸モマタ翁ガ意匠ニ成リ、ソノ庭園ノ布置ニ至リテハ、最モ数奇ヲ極ムルモノアリト称セラル」〔伝記〕財界第一線を退いてなお、おのが趣味をなすがしろにしない風情のほどがしのばれる。

この邸が、重太郎の終の棲家となるが、元の市電の上本町三丁目を東へたらだと二〇〇メートル下がった辺りだ。現在は団地に呑みこまれて、梅屋敷同様、旧を尋ねるにも尋ねようのない変わりがたである。

そこから目と鼻の先、どんどろ大師のそばで育ったのが林宏次。またの名は秋田実——東大セツルメントに拠つて、学生運動に狂奔、のちに帰阪して漫才台本の作者になった人といった方が通じやすい。明治三十八年二九〇五、玉造に生まれ、この空堀三丁目のどんどろ大師付近で小学校卒業まで育った。失意の生活を強いら

れた重太郎の晩年と重なってくる。残念ながらこの秋田実には、松本重太郎に関しての書きものめいたものがない。

とはいうものの、短いエッセー「真田の抜け穴」で、このあたりの風景を描いている。

当時は清水谷女学校の裏側が小高い丘になっていて、そこに立つと北東の近くにやはり丘の上に建っている明星商業の校舎が眺められた。その間が深い凹地になっていて、その谷底に下りてまた上って行く険しい道がいくつもあった。……そのころまだ玉造までの市電がなかった時代で、上本町三丁目から東への空堀の通りが、賑やかなメイン・ストリートで、西は松屋町筋に、東は東への旅の玉造が出口になっていた。いつも駕籠「かご」をかついだ葬礼の長い行列が通ったし、牛車や馬車が一日中すれ違っていたし、そう広くもない通りを時には人力が忙しく駆け抜けて行った。〔大阪新聞社編『浪花のロマン』所収 昭和四十二年十月〕

文中「葬礼の長い行列」が、ひんばんに通ったと書いているが、この辺りは上町台地の寺町で、それこそクシの歯のように寺が並んでいたからだ。大正二年、この林「秋田」少年は小学校の二、三年くらいであったはず、「葬礼の長い行列」の中の一つにえんえんと続く「松本重太郎の葬礼」を見たに違いない。

重太郎が、さきの梅屋敷、ついで空堀と上町台地に執心しているのは、どうやら指呼の間の地に、おのが菩提寺・鳳林寺が存するからだ。

すでに、明治十五年、みずからの入滅する場所としてこの寺をえらんでいる。第二次大戦で戦火を浴びて本堂その他烏有<sup>うゆ</sup>に帰して墓石もまたやけただれたあとを残してはいるが、なお境内に存置している。郷党の後輩たちが春秋彼岸のころ、墓前に額づく姿が見られるという。

長い明治の歳月も終わりを告げて、得体は知れぬが新しいものの模索がはじまる大正の時代となった。一〇年ひとむかし、百三十銀行の取り付け騒ぎもいまや昔語りとなるうとしていた。それを思い出させるように、松本重太郎永逝の訃報が、市中財界関係者の間をつっ走った。昨明治四十五年三月、食傷の気味ありというので、医博湯川玄洋の診察を受けて以来、一進一退を重ねるうちに「腹腺の癌腫」と判明、これが命取りとなったのである。その日、宮内省から次のような位階特進の報らせがあった。

危篤ノ趣 天聰ニ達スルヤ、翁ガ生前実業界ニ尽瘁セシ功劳ヲ嘉セラレ、同日左記ノ如キ、位階陞叙ノ恩命ニ接セリ、

宮内省御沙汰書

從七位勲五等 松本重太郎

特旨ヲ以テ位三級被進

大正二年六月二〇日 宮内省

從七位勲五等 松本重太郎

叙正六位

大正二年六月二〇日

宮内大臣從二位勲一等 渡邊千秋

永逝の日の午前一〇時に納棺、一日おいた二十二日、阿倍野葬儀場で密葬、茶畏、二十三日に拾骨式が行われた。嗣子忝藏、未亡人浜、忝藏夫人光子、同長女朝子、同長男重治、重太郎養子虎吉ら家族のほか、近親者の手によって密葬は完了した。

越えて二十五日、本葬儀は四天王寺本坊で執行されたが、『伝記』は、

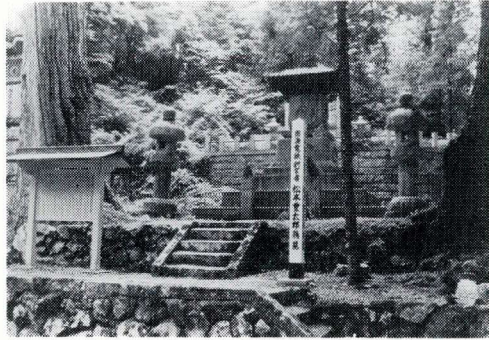
此日初夏ノ空ハ晴レテ暑威一入強ク、此人傑ガ帰天ノ式ヲ挙グルニ恰好ノ天ナリキ、午後三時本邸〔空堀三丁目〕ヨリ葬礼ヲ調ヘテ出棺ス。導師、協導師以下參從ノ僧侶ハ、永平寺以下十二箇寺ニ及ビ、其数合シテ七十有一人ニ達シ

たと誌している。

そのころ、高野山で修業中であつた加藤諦道師〔現常喜院住職〕は、二〇代に達したばかりのところだが、この葬礼に参加している。その実見談によると、

喪主の忝藏さんが、棺の直後について、空堀の本邸を出ました。空堀の坂を西に向って上り、一たん谷町筋へ向かい、その角を南へ曲がりました。いま地下鉄の谷町線のある筋だが、そのころは、せまい道路でずっと寺が続いていました。道筋に、松本さんの菩提寺鳳林寺がありました。その住職能仁義道師が、

高野山奥の院の一角を占める松本重太郎の墓



大役を承っていたことを覚えています。とにかく、道中のせまい道が一バイになる往来でしたが、葬列の先頭が四天王寺の本坊に達したとき、その末尾がまだ空堀の邸とつづいていたというハナシが伝わっています。かれこれ半里見当(二)三(三)続いたというから、りっぱなものです。やはり松本さんの高德の現われということでしょうか。

どうやら五代友厚以来の大葬儀であった、と思われる。五代の場合は、「葬儀は、明治十八年十月二日、中之島の邸宅〔現在の日銀大阪支店敷地の西寄〕で、神式によって執りおこなわれた。葬列は五〇〇〇人のひとで一五町におよんだ。最近発見された明治十八年十一月発行の『商業資料』の記録によると、葬列の先頭が天王寺の火葬場〔いまの壱番場〕に着いたとき、後尾はまだ長堀橋を歩いていたということである。」「小寺正三『五代友厚の生涯』『浪速のロマン』所収)

往時、明治二十年代の松本重太郎を、五代友厚の後継者と評する評者があったが、この二つの葬列を並べてみてうなずけるところだ。一面、松本の場合は、心ならずも財界一線から身を退いたのち、一〇年の月日が経過しているにもかかわらず、上記したような盛儀。やはり、葬儀を盛大ならしめた地元財界人たちの心中に敬慕してやまなかつた情誼のようなものがあつたに違いない。

外山脩造は大正二年六月十五日、『大阪日日新聞』で、松本重太郎と田中市兵衛兩人を回顧して、次のように述べている。

おそらくは、明治二十年代の産業界全般が例外なくといっていいほど躍進しはじめたころを想定しての例えばなしと思われる。

この短文の中にも重太郎の率先躬行タイプであることを強調している。彼が実業界から身を退いてのち、いちじるしく精彩を欠く晩年が来たのも当然であろう。事業を離れて、ついに重太郎の生活はなかつたといえる。

曾ては吾徒三人が大阪の財界を背負って起つた事がある。三人はしばしば事を共にし、よく手を取り合つて働いたものだ。人生の活動はすべて戦争である。実業界の活動は最も著しい平和の戦争である。而して戦いはおのずから道がある。備えがある。三軍の備えを立つことは古来の動かし難き方則である。將軍大將たるものは、即ちこの三軍を指揮すべき者で、三軍とは即ち前軍、中軍及び殿軍がこれである。吾



晩年の外山脩造

徒三人はよく事を共にし、ままた手を携えて戦うた。而して三軍の備えを立つるや、前軍に將たる者は必ず松本重太郎であった。松本は精悍最も攻勢をとるに適した。前軍はつねに接戦部隊である。泰然として動かざる者は田中市兵衛であった。「中略」余「外出」はつねに殿軍の司令にあった。戦い終つての跡は余の任であった。「中略」三人その任を異にして……長短相補つたのである。……思うに松本は辛うじて前軍と共に中軍の司令をなし得たであろう。……しかし松本をして殿軍の事を司らしむると余をして前軍の將たらしむることは、ついに絶望であつたろうと思う。……松本は絶対の闘將、余「外出」は守將で市兵衛独り辛うじて三資格を具有したのであつた。

この外山脩造、松本重太郎の訃報をきいたとき「歩行不自由のため浜寺別邸に隠棲したりしが……直に夫人をして、まず同家に代弔せしめ、さらに仮葬式の当日には人に助けられ大阪空堀なる松本氏の邸を訪い、遺骸を拜してねんごろに弔意を述べ、出棺を門前まで送つた」という。

松本重太郎が世を去つて七〇年が経過した。前世紀ではなく今世紀になつて鬼籍に入つたのである。したがつて大阪の産業発達史や財界史などととりあげられるはずなのに、ふしぎなほど無視され続けてきた。やはり去る者は日々に疎しとすべきか。

人の一生を論じる場合に、その人が、そのしていた事業を完成し、これによつて財をためたか、ためぬかということ標準にしてはならない、……特に大阪の人々は、財産を作つたか作らぬかによつて、その人の賢愚の標準にまでしようと考へている人が多い。だが、事業を行う人に、二つの種類がある。地道に、一人一業主義位で、その事業を完全にする人である。その一人は、仕事をしていること、そのことがおもしろくて、その仕事の結果の如何を顧みない人である。五代友厚の如きはその後者に属している。

そして藤田傳三郎、松本重太郎両氏のごときも、またこの種の人である。孔子が、治国平天下の道を説いて、齊東の都に漂泊して死んでしまつても、誰も、これをわらわれないのと同じように、先驅者としてなすべき仕事をなして死んだことは、その後、財がなかつたからといつて、冷評すべきではない。



家族に囲まれる晩年の松本重太郎  
左から孫重治、重太郎、泰蔵、孫朝子、  
夫人浜、養子虎吉、泰蔵夫人光子

以上は、直木三十五が、ようやく文名高からんとした時に、新聞の連載ものとして書かれた『大阪物語』の統編の『五代友厚』の中の一節である。前篇が、談論風発の「浪花から大阪へ」といった読みものであるのに対し、その後篇に当たる部分は、雄大な「五代」の一代記。小説家の筆になるものだから、もちろんフィクションの部分もあるが、全編荒唐無稽なはなしばかりではない。重太郎の事蹟についても、末尾のあたりでかなりくわしく述べており、高い評価を与えている。

直木のことばをいいかえてみると、事業家とは、利ザヤかせぎやカスリ取りに明けくれているようではない。事業を興し、組織し、運営するのが、その真骨頂ということである。

直木三十五〔本名植村宗二〕は、明治二十四年生まれで、少年時代、南区内安堂寺橋二丁目に住んでいた。中学校を終えるころ〔明治三十八、九年まで、その場所にいた。松本重太郎の終焉の地、空堀通三丁目とは、つい目と鼻のさきで、歩いて五分くらいの所であった。『大阪物語』を書いていたとき、少年のころ耳にした「百三十銀行破綻す」というニュースを思い出していたにちがいない。

さらに、直木三十五が昭和九年没した後、すい星のように現われたのが、『夫婦善哉』の織田作之助（一九一三—一九四七）。大阪の庶民風俗作家といわれたが、戦後は破滅型とか無頼派とかいわれながら世を去った。

「意外にも」とよくいわれるが、この織田作之助の作品の中に戦争末期に書かれた『五代友厚』（単行本 昭和十八年九月）がある。どういう風のふき回しか、正面を向いた伝記で、といって時局迎合ものでもない。主役はむろん五代だが、文中に松本重太郎が数か所登場してくる。格別にとりたてていうほどの異説を立てているようでもない。阪堺鉄道の創設を叙したあと

私は、現在南海鉄道高野沿線に住み、常時南海鉄道の恩恵を蒙っている。現在ばかりではない。幼時から南海沿線の住吉、大浜、浜寺、和歌山へ行く機会が多く、南海電車は私の最も親しみ深い郊外電車である。今でも旅行から帰った時、難波まで来てはじめて大阪へ帰ったという気がする、それほどである。その南海鉄道が友厚を創始者としているとあれば、この点でも私の友厚から蒙る恩恵またなしといつては、いい過ぎだろうか。

と南海をなつかしみ、そのあと、重太郎の例の「豆のはなし」が出てくるが、右の引用文中に友厚を創始者

とするのは小さな誤解だろう。

この織田作之助は、上汐町四丁目生まれで、やはり上町台地の住人であった。彼の『五代友厚』をみると『雙軒松本重太郎翁伝』を何度となく読み返したあとがうかがえる。作之助の墓所は空堀三丁目から、ものの二、三分の所にある。